

335  
Ka381k



0025331-000

335-Ka381k

企業及政策の理論

上林貞治郎・著

伊藤書店

1943

ADF



335  
Ka381a

日本學術論叢

企業及政策の理論

・上林貞治郎著

前篇

構成體論的企業論分析

ゴットル企業論の究明

後篇

沒價值性的政策論分析

マックス・ウェーバー政策論の究明

伊藤書店刊





この署名は本館調査員佐野隆主筆 佐野隆主筆氏の  
の署名にみえるものである。(1957年12月)



日本學術論叢

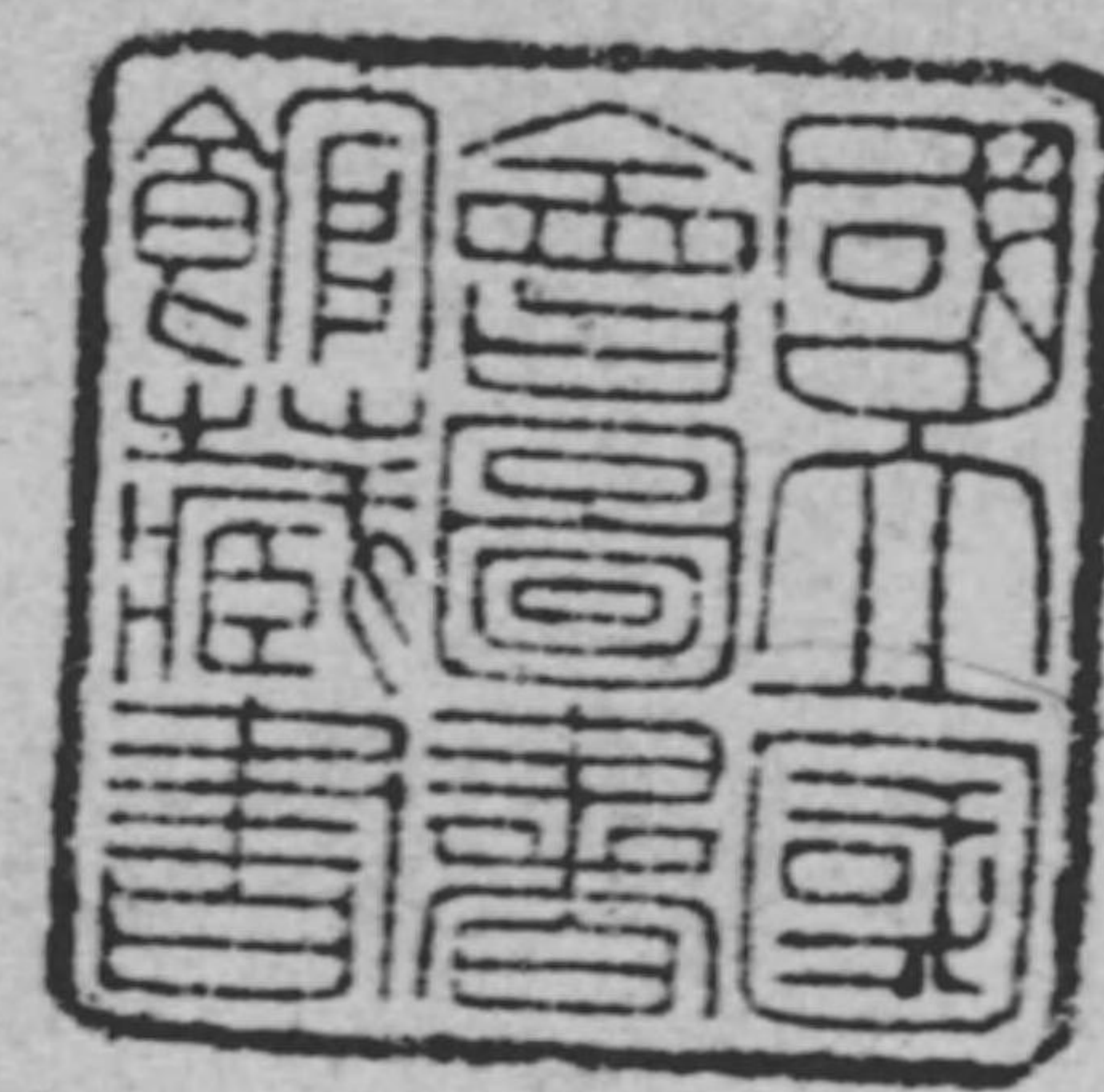
企業及政策の理論

上林貞治郎著

伊藤書店刊



335  
Ka38/k



448148

序

筆者の手稿舊稿の中からゴットルの企業論及びウエーバーの政策論に關したものを整理してこの小著を編んだ。これらの諸稿はすでに數年以前の作成にかかり、それ以後の筆者は殆んどゴットル及びウエーバーから遠去かつてゐる。その間においてゴットル及びウエーバーに關した多くの著書・論文・翻譯が世に現れてゐる。それにも拘らずこの小著を改めて編む所以のものは、ゴットルの企業論及びウエーバーの政策論に對する筆者なりの分析視角及び問題提供がこの小著の中にも含まれてゐると思ふが故である。

前篇「構成體論的企業論分析」―ゴットル企業論の究明―は、主として拙稿「ゴットルの企業理論」經濟學雜誌第三卷第六號及び「ゴットル企業理論の分析」經營學論集第十三集に基き、それを若干補筆したものである。この二舊稿は、ゴットルの諸論著の中から企業論に關した諸部分を、筆者の視角の下に抽出・整

序

一



理・壓縮して作成したものであり、若干の補筆の上でそれをここに収録した。後篇「没価値性的政策論分析」―ウエーバー政策論の究明―は諸々の舊稿手稿を整理して作成したものである。これらの諸舊稿手稿はウエーバーの諸論著の中から政策論に關した諸部分を、筆者の視角の下に抽出・整理・壓縮して作成したものであつたが、いまそれらを整理結合してこの後編を作成した。

筆者がゴットル及びウエーバーの方法論・經濟理論に多少其の研究關心を有つたのは、すでに十年以前の學生時代である。當時そのゴットル研究は福井考治先生によつて觸發せられ、そのウエーバー研究は藤田敬三先生によつて觸發せられ、以後共に多くの示教を賜つたのであり、記してその學恩に感謝の意を表する次第である。なほ現在ゴットル及びウエーバーから遠去かつてゐる筆者がその手稿舊稿を編んでこの小著を出すに至つたのは、主として伊藤書店の勸誘によるものである。

昭和十七年十月

上林貞治郎

目次

前篇 構成體論的企業論分析

—ゴットル企業論の究明—

I 序言……………三

II 企業の生成……………八

III 企業の構造……………一五

IV 企業と國民經濟……………三三

V 若干の具體的問題……………三六

IV 批判的結言……………四三

後篇 没価値性的政策論分析

—マックス・ウエーバー政策論の究明—

I 没価値性論……………五一



# 企業及政策の理論

目次	
1 没価値性	一五
2 科學的可能範圍	一五
3 没価値性の根據	一六
4 若干の誤謬批判	一七
II 没価値性論批判	一七
1 存在と當爲	一七
2 價值鬭爭說II多神論	一八
3 科學觀・實踐觀	一九
III 没価値性論註釋	一九
1 ウェーバー註釋	一九
2 補論	一五



## 前篇 構成體論的企業論分析

—ゴットル企業論の究明—

### I 序 言

構成體論的企業論の典型・代表はゴットルの企業論である。一般にゴットル經濟學の特徴は「生としての經濟」Wirtschaft als Leben の把握である。經濟は「生」として、「生への構成」として、「人間共同生活の構成」として把握せられる。即ち經濟は「欲求と調達との持續的調和なる精神における人間共同生活の構成」として把握せられる。ここに彼がいふ「生」とは「統一・作用・持續」Einheit, Wirken, Dauer の共働を意味してゐる。——これがすべての生の「經驗的」根本思想である。そして「生への構成」とは、「生起の持續と存立との統合」を意味してゐる。共同生活については生への構成＝社會的生への構成・人間共同生活の構成は「體驗せられた生起の持續と存立との統合」Zusammenordnen des erlebten Geschehens zur Dauer und Bestand



を意味してゐる。そしてこの統合は、構成の統一體を生ずるのである。かかる共同生活の構成の統一體が「社會構成體」とよばれる。人間は單に社會構成體の中においてではなく、それによつて即ちその構造への入り組みによつて、生活してゐる。そして經濟は、つねにかかる「社會構成體」において現實的である。經濟への構成により生ずる構成體<sup>II</sup>「經濟構成體」、即ちこれである。かくてゴットル經濟學の特徴は、「構成體論的經濟學」Gebildetheoretische Wirtschaftslehreであり、その經濟學的思惟は「構成體中心の思惟」Denken in Gebildenである。ゴットルは、かかる理論の特徴を「用役としての經濟」Wirtschaft als Leistung の把握<sup>II</sup>財貨論 Güterlehreとの對照において明かにしてゐる。<sup>1)</sup>

ゴットルによれば、みぎの「生としての經濟」の把握は、素朴なる「用役としての經濟」の把握に對向する。即ちこの素朴論においては、經濟は「過程」Vorgang としてみられ、この過程は特定の成果を充たすことにより意味を有ち、かくて「用役」として考へられる。そしてこれは、人間は多種の欲望を起し、しかも欲望充足の手段が限られてゐるといふ表象と結びつく。かくして經濟は、「欲望充足のための人間の配慮的行爲」なる用役として考へられる。經濟を、配慮深き欲求調達、生活の諸目的に對する手段の計畫的充用、生活配慮或は生計配慮等々として表現する

ものは、すべて「用役としての經濟」の把握に歸一するといはれる。

そして「用役としての經濟」の素朴論においては、經濟は「欲望」に起因する過程として展開せられる。この欲望の充足は「手段」の存在に依存する。かかる手段として物は「財貨」の意味を獲るのである。しかしながら欲望に對して財貨は限られてをり、それ故に理性の強制から財貨を「節約」せねばならぬこととなる。かくて經濟は、所謂「經濟原則」に従ふのである。しかるにこの「經濟原則」は財貨と關係するのみであるが故に、素朴論では「財貨」が問題の中心となる。即ち經濟は用役なる意味の過程として考へられ、そして生産から消費に至る「財貨の運命路」Schicksalsweg der Güter に沿つて經過するのである。かくて經濟は、財貨の生産・流通・分配・消費といふことに盡きるのであり、素朴論は「財貨論」となり終る。

かかる財貨論の「財貨中心の思惟」Denken in Gütern はゴットルによれば、まさに「構成體中心の思惟」の反對物である。即ちそこでは「人間共同生活」の代りに財貨運動の機構が中心とせられ、人間的なものはその單なる隨伴現象に留まつてゐる。かかる「財貨論」は全く「非社會學的」或は「反社會學的」なものである。そこでは生としての經濟、即ち人間共同生活の構成としての經濟は、純粹に數量的な「財貨生活」Güterleben に取つて代はられてゐる。かように、



用役としての經濟の把握においては、用役の物的擔當者たる財貨が前面に出でて、經濟生活の代りに「財貨生活」が現はれるのである。

かくのごとくゴットルは、「構成體中心の思惟」II「生の理論の思惟」Lebenstheoretisches Denken. を「財貨中心の思惟」II「用役論的思惟」Leistungstheoretisches Denken に對向せしめる。さらにこれと關聯して、構成體中心の思惟を「個人」中心の立場に對立せしめる。即ち素朴論は經濟を欲望充足のための配慮とみるのであるが、この「欲望」なるものは「個人的生」の心的事實に關するものである。それ故に欲望を經濟の基礎とすることは、すべての經濟を「個人」に關係せしめ、經濟を所謂「經濟的個人」から直ちに出發せしめ、その所謂「經濟行爲」の全體が經濟生活を形づくることとなる。しかるにこれに反して構成體理論においては、共同生活に對して第一次的なものは構成體に構成せられた生である。社會構成體が、共同生活への直接的參與者であり、共同生活の決定的主體である。個人的生の統一體II個人は、第二次的なものであり、この個人は、社會構成體を通じて、社會構成體の地位を充たすことによつて、共同生活に參與するのである。社會科學的思惟、ここでは經濟學的思惟は、まさにかかる把握を要求するのである。

以上のごとくゴットル經濟學の特徴は、生としての經濟の把握、構成體中心の思惟、構成體理論であり、これは用役としての經濟の把握、財貨中心の思惟、經濟的個人の理論に對立せしめられる。さてかかる構成體理論的經濟學において「企業」は如何に把握せられてゐるか。我々はこの問題を「ゴットルの企業理論」なる題目の下に取り上げようと思ふ。そして企業に關する諸問題の中で、ここでは「企業の生成」、「企業の構造」、及び「企業と國民經濟の關係」なる三つの問題を考察の中心とする。即ち(一)社會構成體としての企業は如何にして生成したのであるか、(二)かくて生成せる企業は社會構成體として如何なる構造を有つのであるか、(三)かかる企業は國民經濟と如何なる關係に立つのであるか。相互に關聯するこの三つの問題をとり上げ、そして「企業と國民經濟との關係」の問題に重點をおきながら、ゴットルの所説を分析することとする。なほ内容的にいへば國民經濟における企業の存在を正當づけてゐるゴットルの論理に焦點をおいて、一つの批判的考察を試みようとするものである。かかる考察によつて彼の企業理論が明かとなると共に、またこれを通じて彼の「構成體理論」の具體的内容が看取せられ得るであらう。

1) Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 7ff.; Wirtschaft als Leben, S. 695ff.; Bedarf und Deckung, S. 1ff.



## II 企業の生成

我々はまづ社會構成體としての企業は如何にして生成したのであるかを問ふ。企業の生成の問題に關するゴットルの思惟の一特徴は「經濟構成體の展開」Ausfaltung des Wirtschaftsgebildesなる思惟である。即ち彼によれば經濟への構成の成果たる「經濟構成體」は、現代においては非常に複雑な形態において存在してゐる。經濟構成體は、それ自らで存立してゐるところの多種類の構成體に展開せられてゐる。これらの諸構成體が、すべて集つて初めて「今日の經濟構成體」を形づくつてゐるのである。そして經濟構成體の展開によつて「經濟者」及び「經濟行爲」も夫異つた形態を取るに至る。かくて「經濟者」の展開が生じ、同時に「經濟行爲」は多種に變化するのである。現代においては「經濟者」は、それぞれ振り當てられた役割によつて演ぜられてゐる。即ち家計者、農業者、手工業者、企業者、國家家計者 Staatshauswirt 國民經濟者 Volkswirt等が、「經濟行爲」におけるそれぞれの受持を分擔してゐる。なほその他のコンチェルン、經濟團體、協同組合、勞働組合等における多數の地位が「經濟行爲」に參與してゐる。これらすべての地位における構成活動が集つて初めて今日の「經濟行爲」を形づくり、これらすべての諸地

位が全部集つて初めて今日の「經濟者」を形づくるといはれる。<sup>1)</sup>

さてゴットルによれば、未展開の單純な經濟生性から、現代の複雑な經濟生性に至るところの「經濟構成體の展開」は、二種類の構成體を創つた。私的私計、公的私計、及び國民經濟におけるのみ、「經濟の意味」II「欲求と調達との持続的調和の構成的保證」gestaltlicher Verbundnis dauernder Einklang von Bedarf und Deckung が、直接的に充たされてゐる。これに對して、私的私計と國民經濟との間における「中間層」Zwischenschicht の諸構成體は、欲求と調達との持続的調和をめざして構成されてゐるのではなく、夫々異つた様式において構成せられており、國民經濟の構造へ奉仕するために存在してゐるのである。ゴットルは前者を「本源構成體」Urgenbildとよび後者を「目的構成體」Zweckgebildeとよんでゐる。<sup>2)</sup>

ゴットルにおけるこの目的構成體は、本源構成體に對比して二つの特質を有つてゐる。第一に本源構成體は經濟生活における「不變的」なものであるのに對して、目的構成體は經濟生活における「可變的」なものである。特定の目的構成體は、經濟生活の特定形成に結びついており、それと共に現れ・それと共に變化し・それと共に消滅するものである。第二に本源構成體はそれ自身目的であるのに對して、目的構成體は、それを構成的に包括するところの上位の「包括構成體」



Umgebildeの構造に役立つことにより、包括構成體の構造からその存在権を得るのである。目的構成體は經濟生活の形成に奉仕するものであり、現代の國民經濟を建設する目的に構成的に奉仕するものである。そして經濟構成體の展開に伴つて、漸次に多種の目的構成體が本來の經濟構成體から派生するとせられる。<sup>3)</sup>

さてゴットルによれば、「企業」は現代に於ける目的構成體の主要なものである。即ち企業は「収益の持続的獲得」dauernde Erzielung von Ertragを目標とせる目的構成體、換言すれば「營利構成體」Erwerbsgebildeである。いま企業の目的構成體としての特質についてみれば、企業は經濟生活における「可變的」なものであり、且つそれ自ら目的ではなく特定「用役」Leistungのために存在してゐるものである。即ちまづ第一に、企業は現代の經濟生活における存在物であり、近代以前の經濟生活にあつては、企業が構成體として現實的に存在し得るところの複雑な諸前提が缺けてゐる。即ち企業は、特定前提の下において「經濟への意志」Wille zur Wirtschaft—それは欲求と調達との持続的調和の構成的保證を指してゐる—から派生されたところの「營利への意志」Wille zum Erwerb—これは収益の持続的獲得の構成的保證を目ざしてゐる—によつて擔はれており、經濟における可變的なものとして現はれる。第二に企業は目的構成體として特

定「用役」のために存在してゐる。企業は現代の國民經濟の構造に奉仕する目的構成體であり、營利構成體の意味における構成として、「營利への意志」—それは「經濟への意志」の特定の「轉向」Umbiegungとして理解され得る—によつて擔はれてゐる。<sup>4)</sup>

以上のごとく企業は目的構成體として經濟の特定の場合に生成し來つたものとせられるが、ゴットルは構成體としての企業の生成過程を、具體的には「家計—混性構成體—企業」の系列において明かにしてゐる。即ち、企業の廣き基底面においてはつねに「交換」が横はつてゐる。交換は「貨幣的交換」として購買と販賣とを含んでゐる。ここですでに、企業が經濟における「可變的」なものとして現實的たり得るがための諸前提が明かである。即ち貨幣、欲求調達における貨幣の使用、貨幣制度、信用、市場等が、企業の存在に先行せねばならぬ。またこれらのものは特定の法律秩序によつて圍まれ、そして所有權を基礎とし且つ大規模の「商業的な給養」を目ざして構成せられてゐるところの經濟生活の中に立つてゐる。この貨幣的交換は、利益を得る意圖において購買と販賣とを連結する。これは「商業的營利」の過程であり、一回的個別的過程としても可能であるところの「二重交換」の過程である。この過程が「持続的繰返し」において行はれることにより、「商業的營利」は「企業的營利」に構成せられるのである。<sup>5)</sup>



さてみぎの商業的營利の過程は、個別的過程としては「家計」によつても行はれる。それは家計のために「所得の獲得」Einwerbung に寄與するのである。いま商業的營利が同一の家計によつて累積せられる場合、特にそれが同一方面において繰返される場合には、この家計は漸次に、企業なる他者に近似する一構成をそれ自身の中から生ぜしめる。この構成はその構造においてすでに企業に近寄つてゐる。しかしながらこの「側面的構成」seitliche Gestaltung は、家計——この構成は家計の所得獲得に資する——と内的に結合してゐる。ゴットルはかかる構成體を「混性構成體」Zwittergebilde. とよび、その具體例として手工業者、農民、小賣商人等をあげる。<sup>6)</sup>

この「側面的構成」が、全く「家計」から解き離され、家計の「娘構成體」Tochtergebilde. としてそれ自らの足の上に立つときに、企業が成立するのである。そしてゴットルによれば、この場合に二つの根本的な變化が相伴ひつつ生ずるのである。まづ第一に「利益への時々の追求」がかかる意欲における固持<sup>7)</sup>「持續における意欲」Wollen in Dauer となるのである。所得獲得の持續的意欲といふかたちにおいて、家計を擔つてゐる「經濟への意志」は、側面的に「營利への意志」に轉向するのである。そしてこの「營利への意志」によつて、新たに生じたところの全構成が擔はれるのである。第二にこれと並んで同時に、單なる「生起」が「狀態的なもの」にな

るのである。このことはまづ「支配力の時々の方向づけ」fallweises Absteuerung von Fugmacht について生ずる。即ち家計の支配し得るすべてのものの中から、支配力の貨幣的に計算せられた一定の範圍が、専ら「所得獲得」に留保せられる。この「貨幣計算的に營利に向けられた支配力の範圍」は、企業の「資本」を形づくる。そしてこの支配力の方向づけは、二つの結果を齎すものである。まづ第一にそれは「資本」のかたちにおいて、所得獲得のために支配せられるところの統一的支配の領域を作る。これによつて新構成が建設せられる基面が作られるのである。第二にこの資本について生ずる支配は、既存の「經濟者」なる地位以外の新たな地位に結合せられる。ここで生成する構成體の胚葉に比すべき地位即ち「企業者」の地位が構成せられる。この地位を充たす者は、「營利への意志」で以つて彼に課せられるところの「理性の強制」に従ふのである。この強制は、この構成體がそれ自らの意味<sup>8)</sup>「収益の持續的獲得の構成的保證」を充たすやうにすべての支配を行ふことを要求するものである。そして「經濟者」は、かの支配力の方向づけの行爲、即ち企業の資本を出すことによつて、最初に企業者地位を充たすのである。<sup>7)</sup>

みぎの「資本」及び「企業者地位」で以つて、企業にとつて初めてその存在への基礎がおかれる。そしてゴットルによれば、この二つのものは「營利への意志」から存立物として作られ、一



と度作らるれば將來に向つて効力を有つところの「備へ」ein für allemal getroffene Vorkehrungなる深き意味を有つてゐる。かかる「備へ」は「生への構成」の構造に對する礎石である。すべての構成活動を支配し、ここでは營利への意志に現はれるところの「理性の強制」から、將來のすべての支配の様式に對して力を振ふところの支配が導き出される。この「備へ」は將來の支配を拘束するところの「高次の支配」、いはば第二次元の支配を意味してゐる。企業者地位における全活動が、収益の持続的獲得の構成的保證なる目的を有つところの企業への構成的活動たることに確定せられる場合、このことはかかる「備へ」たる意味を有つてゐる。また「支配力」が欲求調達のための利用から取り去られ、この支配力が専ら企業的營利のために保留せられる場合、かの「資本」を設定する方向づけも、かかる「備へ」たる意味を有つのである。<sup>8)</sup>

以上において我々は、ゴットルにおける社會構成體としての企業の生成を、經濟構成體の展開—目的構成體の派生—目的構成體としての企業—家計と企業との分離、の順序において考察し、以つて企業生成の「構成體理論」的把握の内容を明かにしたと思ふ。我々はつきにかくて成立せる企業は構成體として如何なる構造を有つてゐるかを問ふ。

1) Gottl, Wesen und Grundbedeutung der Wirtschaft, S. 46ff., 81ff.

- 2) Derselbe, a. a. O., S. 47—49.
- 3) Derselbe, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 476, 942.
- 4) Derselbe, a. a. O., S. 471.
- 5) Derselbe, a. a. O., S. 775, 783.
- 6) Derselbe, a. a. O., S. 786.
- 7) Derselbe, a. a. O., S. 786ff.
- 8) Derselbe, a. a. O., S. 786ff.

### III 企業 の 構造

我々は企業の構造の問題として、ゴットルにおける企業の「構成的構造」の問題を取り上げる。彼によれば従來の「素朴論」においては、企業は「持続的な利潤獲得のための施設」或は「生産の三要素の組織的結合」等として解釋せられ、そこでは單に一の「組織」Organizationが考へられてゐる。企業の内的構造は「組織」として、即ち「技術的に理性的な協同の統一」として、收益のための多種の活動の共働として考へられてゐる。營利生活の日常的思惟、その技術方策論、



經濟の素朴論においてはみなしかりである。しかしながら「成熟せる理論」<sup>1)</sup> 構成體理論は、經濟を用役としてではなく生として把握すると同様に、企業を「協同」*Kooperation* かくて單なる「技術的構成」として把握するのではなく、「生への構成」として、「社會構成體」として把握せねばならぬ。企業は、個人的「行爲者」の立場から「實用主義的」に考へらるべきではなく、それは「用役」としてではなく、「生」として把へられねばならぬといふ。では企業は構成體として如何に構成せられるか。その「構成體としての構成的構造」*gestaltlicher Aufbau als Gebilde* は如何なるものであるか。

ゴットルドによれば、體驗せられた生起が持続と存立とへ統合せられることによつて、社會構成體が構成せられるのである。企業においては、「収益の持続的獲得」なる精神においてすべての生起が持続と存立とへ統合せられる。かかる統合を行ふ「構成活動」*gestaltendes Wirken* を擔つてゐる地位が「企業者」である。この企業者の構成活動によつて、全過程が企業へ構成せられるのである。そしてこの構成活動たる統合は、「段階的」に三つの段階において行はれるといふ。

構成の第一段階においては、「資本」及び「企業者」なる二つの根本的「備へ」の基礎の上において、すべての過程につき「備へ」が構成せられる。企業者の構成活動によつて統合せられる

源的な要素的過程として、主體即ち個人の「作業」、客體即ち物の「使用」、及び物の「消盡」なる三つの過程 *Verichtung, Gebrauchung, Verbrauchung* が存在してゐる。これらの要素的過程の繰返しのために、「地位」「設備」及び「貯藏」なる三つの「備へ」*Stellung, Anlage, Vorrat* が初次的統一たる「構成體部分」*Gebilde* として形づくられる。これによつて各過程は持続的となり、即ち作業は「役務の給付」なる持続的形態をとり、使用は「設備の利用」なる持続的形態をとり、消盡は「貯藏の費消」なる持続的形態をとるのである。

しかしながらみぎの三つの「備へ」は、分離して存在するのではなく、諸過程の持続的繰返しを可能ならしめるために共働し內的に結合することによつて、構成體部分としてのその眞の意味を充たすのである。即ち構成の第二段階においては、地位・設備・貯藏なる三つの備への結合から、一の持続的な統一が構成せられるのである。かくて構成せられるところの「備へ」を基礎とせる特定過程の持続的遂行<sup>2)</sup>を、ゴットルドは「經營」とよんでゐる。地位・設備・貯藏なる三つの備へは、この「經營」なる「部分構成體」*Teilgebilde* に結合されることによつて、それぞれ經營の構成的屬性としての「經營従業員」、「經營設備」、「經營貯藏」*Belegschaft, Betriebsanlage, Betriebsvorrat* となるのである。これによつて過程は、經營的に行はれる過程となり、持続的に



遂行されるのである。

しかしこの部分構成體としての經營は、それ自らで存立を維持してゆくことを得ず、企業なる上位の構成體即ち「完全構成體」Vollgebilde に組入れられ、かくて企業における諸經營が統一的に結合して、初めてよく存立し得るのである。即ち構成の第三段階においては、諸經營の結合から企業が構成せられるのである。經營は、企業構成における必然的中間項であり、企業の構成的構造における建築石材である。この意味において、企業はまさに「經營の體系」である。いま諸々の經營が企業において如何に體系づけられるかを、ゴットルは主として工業企業を例としてつぎのごとくのべてゐる。

企業においては、「企業者」及び「資本」なる二つの根本的備へが、他の備へに圍まれて「指導經營」Führungsbetrieb に結合せられる。ここでは企業におけるすべての構成活動が、經營的に行はれ持続的に繰り返へされる。この指導經營は企業の精神的核である。指導經營に對しては他の諸經營は、指導經營と存在上及び意味上の相互制約關係にあるところの「被指導經營」として存在してゐる。これら諸經營の主要なるものは、購買經營、生産經營、保管經營、運搬經營、販賣經營等である。現代の大規模工業企業においては、購買經營と販賣經營との中間連結者とし

ての生産經營が、企業のいはば技術的核心を形づくつており、それ自らの中に諸々の經營を含み、それ自身すでに一の小經營體系である。さて企業の大規模化と共に、みぎの「指導經營」と「被指導經營」との間に「中間經營」Zwischenbetrieb が仲介者として組入れられるにいたる。それは「内部管理の經營」であり、企業者から委任せられた活動範圍における行爲によつて、間接的に企業者の構成活動を援助し、かくてそれはいはば指導經營の「支局」として考へられる。以上の諸經營は企業における「主要經營」であるが、企業の大規模化と共に、これらの主要經營の外に、それぞれのいはば第二次的な經營が構成せられるに至る。即ち諸經營にそれを補充するための「副次經營」Nebenbetrieb が伴ふに至る。例へば指導經營に諸種の統計、景氣觀測、市場分析等の經營が、生産經營に副産物利用等の經營が、それぞれ副次經營として伴ふ場合がある。また諸經營からその中の或る過程が分離せられて、「補助經營」Hilfsbetrieb が構成せられる。例へば指導經營から、通信、簿記會計、原價計算等の諸過程が分離し、特別の經營に構成せられる場合があり、これらの補助經營は指導經營を圍繞し、それを支持するものである。

さてゴットルによれば、企業における諸種の經營は、相互關聯的にその運行を維持促進し合ひかくて諸々の過程の持続的繰返しが保證せられ、經營の統一的體系としての企業がそれ自らの存



立を維持するのである。そして企業が「完全構成體」として、「部分構成體」たる經營の正しい體系であるがためには、諸々の經營は、その種類の多様性からみて正しい「質」的組合せ *Mischung* において存在すべく、且つその數及び經營成果の量的範圍からみて正しい「量」的組合せ *Mengung* において組合さるべく、さらに全經營が相互に正しい「配序」 *Anordnung* の中におかれねばならぬ。なほまた經營の體系としての企業は、その「環界」 *Umwelt* に積極的消極的に正しく適應すべく、商品市場、資本市場、労働市場等と正しく調和せねばならぬ。かくて企業の構成的構造は、「環界への適應の考慮の下における正しい質的及び量的組合せにおける諸經營の統一的配序」として要約せられる。<sup>2)</sup>

以上において我々は、企業の構成的構造に関するゴットルの所説を分析したが、その構成的構造なるものは、主として企業の「社會構成體」としての構造の解明に留まり、企業の「營利構成體」としての經濟的内容的構造の解明としては不充分である。それ故にこれを補ふ意味において、企業における「構成活動」及び「労働」——企業者及び労働者——に関するゴットルの所説を考察することとする。

彼によれば、企業における各「地位」の成素としての人間行爲は、その種類内容を異にしてあ

るが、原理的性質によつて區別すれば、「構成的行爲」||「構成活動」 *gestaltendes Handeln, Gestaltendes Wirken* と「執行的行爲」||「労働」 *ausführendes Handeln, Arbeit* とに分たれる。この構成的行爲は、さらに企業構成的行爲、經營構成的行爲、技術的構成の行爲に分たれ、それぞれの擔當者が企業者、經營主任、技師である。また執行的行爲||労働は、構成的行爲により構成せられるものであり、構成的行爲との對照においてみれば「經營を充たす行爲」 *Betriebsfullendes Handeln* ——「經營を構成する行爲」に對する——であり、「經營により支配」せられ——「經營への支配」に對する——「經營における労働」——「經營への活動」に對する——であり、「經營適合的」 *betriebsgerechtes Handeln* なる行爲であり、その擔當者が労働者であるとせられる。

さてみぎの「構成活動」と「労働」との二行爲は、ゴットルにおいては、經濟に「本質的」であるか否かについて、同一段階に立たない。即ち生への構成として構成活動のみが、すべての經濟に「本質的」であり、眞に「不變的」なものである。構成者としてのみ人間は、經濟及びその中の生産の主人たる役割を演ずるのである。構成活動の經濟的な「遍在性」及び「全權力」 *Allgegenwart und Allgewalt* に對して、労働は第二次的であり、構成活動の意義は労働の意義に優越してゐる。所謂「労働の生産力」なるものは、「一人當りの經營成果」 *Kopfquote an Ertrieb* なる



る計算的事態を意味するものであり、これを決定するものは構成活動であり、「労働の生産力」の増加といふことも構成活動に基くものであるといはれる。<sup>3)</sup>

そして構成活動に對するところのこの「労働」なる行爲の特徴として、ゴットルは、(一)非獨立的なこと、(二)斷片的なこと、(三)機械化され得ることの三つをあげてゐる。かかる労働には、辛いこと、一律單調なこと、時間で以つて測定され得ること等の諸性質が附着してゐる。而して現代において「労働の質的悪化」なる現象が存在してゐる。即ち労働はもと一個人の中に構成活動と結合せる「完全労働」Vollarbeitであつたのであるが、「合理的」經濟がこの構成活動と労働との「人的結合」Personalunionを打ち破り、兩者は分裂して労働は「赤裸の労働」nackte Arbeitとなつたのである。「大經營的・機械的生産」において典型的に現はれてゐるところの「量的な統一的・機械的經營」といふ現代の經濟様式が、かかる労働の質的悪化の根源である。しかしながらこの經濟様式は、まさに西歐文化國民の存在形態を條件づけてゐるものである。即ち人間の存在を可能ならしめてゐる經濟様式が、その反面においてその社會必須的行爲で以つて人間を經營的束縛の中に入れてゐるのである。かくてゴットルは「労働悪化」なる悪は「資本主義」と共に來つたが、それは資本主義と共に消滅しない。この意味において、この事態は現代の資本

主義的經濟秩序を超えるものであるとする。そして彼が労働なる事態を、「現代の貨幣労働の經濟運命」の問題から展開せないのは、この事態は全資本主義を凌駕するものであるが故であるといへる。

以上において我々は、企業構造に關する問題として、ゴットルにおける「企業の構成的構造」及び「構成活動と労働」に關する所論を分析した。これにより我々は、經營の體系としての企業の段階的構成の内容をしり得、且つ企業の實質的構造における重要な要素たる労働に關するゴットルの見解を明かにし得たと思ふ。

- 1) Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 768.
- 2) Derselbe, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 792ff.; Wesen und Grunds begriffe der Wirtschaft, S. 52ff.
- 3) Derselbe Bedarf und Deckung, S. 148ff.
- 4) Derselbe, Fordismus, S. 114ff.

#### 四 企業と國民經濟

上來の「企業の生成」及び「企業の構造」の問題に關するゴットルの所説の分析は、その問題



自體としてなされたと共に、また他の一面においては、「企業の國民經濟との關係」なる問題への關心の下において、この問題との關聯においてなされたのである。その行論においてすでに我々は、ゴットルにおいては、企業は國民經濟の構造に奉仕する目的構成體として生成せることをみたのであり、且つかかるものとしての企業の構成が如何に行はれるかをしり得たのであるが、つぎに「企業の國民經濟」の問題として取り上げ、これがため國民經濟の構成及びそれにおける企業の役割に關するゴットルの所論を分析することとする。

我々はまづゴットルにおいて「國民經濟」そのものが如何に把握せられてゐるかを問ふ。彼によれば、家計及び企業は「要素的構成體」elementare Gebilde. であり、かかる要素的構成體の相互作用から、高次の成體たる經濟的「包括構成體」Umgebilde が構成せられるのである。包括構成體は要素的構成體をその「在內構成體」Ingebilde として構成的に包括してゐる。この上段の構成體においても、欲求と調達との持續的調和の構成的保證といふ「經濟の理念」が充されねばならぬ。しかして包括構成體の構成は、要素的構成體間の相互作用の行はれる範圍に準じて行はれる。かかる範圍は、共同生活の「政治的構成」にしたがつて前與せられてゐる。政治的構成は、特定範圍の限界づけを伴ふものである。かの「村落經濟—都市及び領域經濟—國民經濟」

なる系列で以つて考へられてゐるものは、構成體間の相互作用の擴大に照應するものである。<sup>1)</sup>

ゴットルにおいては「國民經濟」はかかる包括構成體である。それは素朴論の考へることく、「所謂私經濟の觀念上の關係複合體」gedachter Beziehungskomplex でもなければ、また他の何らかの「抽象的存在」Abstraktum でもなく、要素的構成體たる所謂私經濟間の諸關係の全體といふやうな單なる思惟上のものではない。國民經濟も構成の統一體であり、現實的なものであり社會構成體として存在する。體驗せられた生起の持續と存立とへの統合—それはここでは廣い範圍において欲求と調達との持續的調和の構成保證にいたる—によつて、國民經濟も、內的に獲られた存立を有ち、その環界に適應せるところの統一體である。國民經濟は、包括構成體としての特殊様式において、正しい「經濟構成體」を意味してゐる。國民經濟のかたちにおいて、「經濟の理念」の充實が、上位の段階において行はれるのである。そこで國家的に結合せられた國民の範圍において、すべての過程が、經濟の精神において持續と存立とへ統合せられるのである。かくて國民經濟は現代の經濟生活にとつて、その「部分」たる要素的構成體及びその他の在內構成體を擔ふところの「全體」である。<sup>2)</sup>そして國民經濟への構成も、すべての構成と同じく、相互に環的に配序せられた「經營體系」として把握せらるべく、たゞここでは、經營は既に構成體への



組成にしたがつて現れ、したがつて構成體間に環的配序が行はれるのである。<sup>3)</sup>

しかし要素的な在內構成體即ち家計及び目的構成體から、直ちに國民經濟に來たのではない。都市、郡、府縣等も經濟的統一體に構成せられる。しかしながらゴットルの見解においては、包括構成體として構成せられる他の諸構成體に對して、現代の國民經濟は、構成の重味と緊密度において遙かに優越しており、國民經濟において就中かの「經濟の意味」が充たされるのである。國民經濟への構成は、最も力強い政治的包括構成體たる「國家」に依據してゐる。國家と構成的に相蔽ふといふことからのみしても、現代の多くの經濟的包括構成體の間における國民經濟の絶對的優越が明かとなる。このことは、國民經濟の中心的な且つ全方面に最も意義の大なる核心的在內構成體たる「國家家計」*Statshaushalt* を含めることによつて、最も強き印象を得るのである。かくて國民經濟は「經濟的最高構成體」*wirtschaftliches Höchstgebilde* であり、すべてを包括しすべてを支配するものであり、現代における經濟への構成の最高の完結を意味してゐる。「國民・國家・國民經濟」なる三つのものは、「共同生活の三最高構成體」であるといはれる。<sup>4)</sup>

以上のごとくゴットルは、國民經濟が單なる思惟上の綜合ではなく、現實的な「經濟構成體」なること、しかも經濟的「最高構成體」なることを強調してゐる。そして經濟構成體としての國民

經濟の構成をつぎのごとく説明してゐる。

家計及び企業のごとき要素的構成體においては、構成は少くとも原理的には意識的行爲として行はれ、その構成は「自己構成」*Eigengestaltung* である。これに對比して、包括構成體たる國民經濟においては、「自動規制」が支配的な規制として作用しており、その構成は「自動的構成」*Selbstgestaltung* である。即ちゴットルにおいては一般にすべての經濟は、欲求と調達との間の作用の構成的規制としていひ表はされ得る。そして現實の經濟生活は、「慣習規制」、「自動規制」、「指導規制」*Brauchregelung, Selbstregelung, Leitregelung* とよぶ三種の規制から規制せられてゐる。この三規制はすべての經濟生活に存在してゐる。そして「經濟構成體の展開」の様式によつて、三規制の中の特定規制が決定的に「支配」するのである。現代の國民經濟においては、「自動規制」が支配的である。この自動規制においては、多數の構成體及び多様の過程の間に複雑な相互作用が行はれることによつて、經濟への構成が行はれるのである。そしてこの相互作用が究極において達成するところのものは、欲求調達との持続的調和の構成保證、即ち經濟であるといはれる。<sup>5)</sup>

かくのごとくゴットルによれば、國民經濟の構成は自動規制を中心とするものであるが、この



自動規制は「企業的營利の支配」 Vorwalten des unternehmungshweisen Erwerbs と結びついて行はれるのである。かくて所謂「資本主義」は、「企業的營利の支配の下における大規模の流通經濟」として説明せられる。さてかかる自動規制の支配せる現代經濟生活においては、私的會計者、公的會計者、及び企業者の三者が、自動規制の作用における役者である。しかして經濟への構成をなす力即ち「經濟的能動性」 wirtschaftliche Aktivität は、就中企業及び國家、特に企業に移行してある。私的會計は比較的「受動的」である。經濟的能動性の擔手としての企業者が、企業的營利の正しい運営により企業を構成せんとすることによつて、「自動」 Automatik の作用が達せられるのである。かくて企業的營利の道において、商品、資本、勞働等の市場において、且つ價格、利子率、賃銀等の經濟的大さの形成を通じて、多數の構成體間に行はれるすべての過程は、それらの相互作用において、元來何人によつても意欲されなかつた成果を齎すのである。この成果は、經濟への構成の内容として自動的に生ずるのである。換言すれば、自動規制にあつては、經濟の意味實現のため、「經濟的な必須的なもの」は「個人的利害」に人間化せられてある。經濟的な必須的なもののために、個人的利害の作用が行はれるのである。これが、究極の成果において、經濟者の構成活動に代はる意味深き代位となるのである。即ち自動規制の達するところ

は、生起の持續と存立とへの統合であり、「經濟への意志」の内容であるのである。<sup>6)</sup>

上述のごとく經濟構成體たる國民經濟は、自動規制を中心として構成せられ、この自動規制は「企業的營利の支配」と結びついてある。そしてゴツトルによれば、「經濟的能動性」を擔當してある企業は、國民經濟の「目的構成體」として、具體的にはつぎの三つの役務を行ふものとせられる。即ち(一)企業的營利は收益の持續的獲得を目標とし、これは企業者の「利潤」の源泉となる。(二)この營利が企業相互の競争において行はれることによつて、それは經濟生活に必要な「給養」一般、「欲求調達」一般に役立つのである。(三)企業は企業に組み入れられた人々の「所得」の源泉となり、その經濟的自立を助け、諸々の會計はこれによつて所得の獲得を確保するのである。企業はかかる三用役を行ふ。そしてこの中「給養」の要素及び「所得」の源泉といふ二つの成果は「附加的成果」であり、持續的には、收益の持續的獲得といふ「第一次的成果」によつて制約せられてある。それ故に企業の活動を一面的に、資本所有者に「資本利潤」を齎らすところの業務の中においてのみみてはならぬ。企業の活動を計算的に「收益の獲得」に集中することは、企業の存在を決定し、企業に本質的である。しかしながらこの「收益」が如何になるのであるか、それは誰人に利潤として歸するのであるか、またそれは企業外に分配せられるか否



かは、企業の本質にとつては問題外である。ただ通例において収益は、企業の充實のために當てられないかぎり、利潤のかたちにおいて資本所有者に分配せられるのである。<sup>8)</sup>

そしてゴットルによれば、この収益分配の背後に、現代經濟生活の自動規制の中に生きてゐるところの「理性の狡智」List der Vernunft が隠れてゐる。ここでも現代の經濟がその理念實現に「經濟的に必須的なもの」は、個人又は集團の「個人的利害」に人間化されて現はれてゐる。資本は企業的營利の基礎をなすものであり、「資本所有者」が利潤の獲得を期して誤りなく行爲するならば、一般に經濟もまた良く行はれるといふことが、この自動規制の意味をなしてゐる。資本所有者の個人的利害は、彼に彼が國民經濟の中に存する資本の注意深き管理といふ國民經濟への役務を行ふように、資本の行使を強制するのである。ここに現代の經濟生活が存在し得るところの意味深き機構が現はれてゐるといふ。「經濟への意志」は、ここでは「營利への意志」に轉向し、これによつて企業的全構成か擔はれてゐる。そしてこれに應じて企業者には、企業的全活動を計算的に収益の獲得に集中することが、「理性の強制」Zwang der Vernunft として課せられてゐる。企業者なる地位も充たす個人は、共同生活からかかる「理性的當爲」Sollen kraft Vernunft に當面するものであるとせられる。<sup>9)</sup>

なほゴットルにおいては、みぎによつても推測せられるごとく、「収益」は「利潤」―資本所有者への収益の分配―と區別せられてゐる。即ちここにいふ収益は、一營業期間における總利益の總損失に超過せるところのものを指してゐる。この収益の獲得のみが企業の「本質」に屬するのである。この収益で以つて後に何が起るか、それが利潤として資本所有者に分配せられるか、或は企業内に保留せられるかは、企業の本質には無關係であるとせられる。この収益を獲得することを、企業は國民經濟に「責任」を負ふてゐるのである。けだしかくしてのみこの營利構成體<sup>11</sup>企業は存在し得、且つかくしてのみ國民經濟の構造へのその役務を給付し得るのである。しかしながら否なそれ故に、その反面において収益への努力は、國民經濟に對する奉仕性によつてその「限界」を引かれてゐる。即ち企業は、賃銀引下げ或は價格引上げ等によつて、この限界を超えることを許されない。もしこの限界を超えるならば、「正當な収益努力」は下劣な「利潤追求」に墮落し、かくして企業は國民經濟の「害物」に變ずるといふ。<sup>10)</sup>このことをゴットルはまたつきごとくのべてゐる。企業は、本來の經濟構成體ではなく、國民經濟の目的構成體である。企業の多數から成り立つてゐるものは、「經濟生活」自體ではなく、「企業の世界」即ち「營利生活」Welt der Unternehmungen, Erwerbsleben. である。營利生活なる中間層―家計と國民經濟との間の



中間層—は、現代の經濟生活の構造における「装置」Apparatur を意味してゐる。即ち國民經濟のための欲求調達の装置を意味してゐる。家計が「國民經濟の細胞」に比喻せられるならば、企業は「營利生活の器關」に比喻せられる。それ故にもし企業の營利が盲目的に神聖化されるならば、營利生活は「反意味的」にそれ自身を超越し、「装置」が「自己目的」に變ずることとなる。かかることはまさに「商業主義」への墮落であるといふ。

以上の分析のしめすごとくゴットルによれば、現代の國民經濟における支配的規制は「自動規制」であり、それは「企業的營利の支配」と結びついており、企業は國民經濟の「目的構成體」として三用役を盡すべきである。そして彼においては、企業と國民經濟とのこの調和—収益への努力が國民經濟的立場からみて正しい線に働くといふこと—は、「原理的」なことではあるが、この調和は事實上しばしば攪亂せられる。かように企業の活動と國民經濟の利害との調和を亂す原因として、彼はつきのごとき場合を擧げてゐる。(一)複雑な經濟生活を充分に把握し、企業者の指針となるところの収益性を推測し、技術・技術的構成を正しく方向づけることは、極めて困難なことである。かかる課題の解決は、産業領域における眞の指導者の任務を果たすものである。この困難の結果として生ずることあるべき「人間的誤謬」が、企業と國民經濟との調和を亂すこと

があるのである。(二)價格、賃銀、利子等の大きさが、經濟的諸關係の「純粹な均衡」に一致しない場合。例へば公權力の關與、企業者の協定等が、均衡を妨げる場合がある。ここでは調和は、いはば經濟への構成自體から亂されるのである。企業的營利の支配と原理的に結びついてゐるところの經濟生活の自動規制は、ここでは他の力によつて無能化せられる。(三)企業が「新なもの」を特定の欲求領域に引き入れるとき、この新たなものの大量的引き入れが經濟の理性からみて正しいか否かが考慮されずに行はれるならば、國民經濟は「企業」の活況の反面において多數の「家計」を萎縮せしめることとなる。以上を約言するにゴットルは、企業と國民經濟との調和を亂す三根源として、基準となる収益性の推測における人間的誤謬、収益性計算に役立つところの經濟的大さの歪曲、及び欲求の人爲的膨脹化を擧げてゐる。そしてかかる原因に基く不調和の結果、欲求と調達との間の作用は亂され、かくて經濟の構成状態は、この所において欲求と調達との持續的調和の保證たることを止める。ここでは企業的營利の支配と本質的に結合してゐるところの自動規制が否定せられるのである。<sup>12)</sup> ここにおいて自動規制は、その「修整者」Korrektur として「指導規制」を必要とする<sup>12)</sup>とせられる。

ここにゴットルがいふ經濟生活の「指導規制」とは、彼によれば、上段における經濟行爲であ



り、國民經濟の組成を目ざしてゐる構成活動によつて生ずる。それは、行爲としての「經濟政策」で以つて實現せられる。そしてこの指導規制の任に當るものが、國民經濟の心臓部における重要な地位即ち「國民經濟者」Volkswirtの地位を充たすのである。國民經濟者は上段における構成活動の主體を現はし、指導規制の本來的擔手を演ずるものである。かの「自動規制」の機構が事實上作用せず、且つ亦「慣習規制」も作用し得ない場合には、指導規制が經濟の組成を正しく保持せんがために生ずる。その本來的任務に従へば、指導規制はかく構成せられた經濟に對して「調節者」Regulatorの役割を演ずる。<sup>13)</sup>指導規制＝經濟政策の深き意味は、經濟的生起の自動規制といふ意味における經濟生活の「自動的構成」に對して、自由な道と廣き場處とを開くことに存するとせられる。

以上において我々は、企業と國民經濟との關係の問題に關するゴットルの見解を分析した。即ち彼によればその關係は、現代の經濟的最高構成體たる國民經濟と、國民經濟の目的構成體なる企業との關係となるべく、そして國民經濟の自動規制は企業的營利の支配と本質的に結合しており、かくて國民經濟と企業との調和は原理的なものであり、かかる調和の實現せられる範圍において、企業は目的構成體としての任務を果たすのである。そしてもしこの原理的調和が亂される

場合には指導規制がその修整者たる役割を演ずるといふのである。

- 1) Gottl, Mythus der Planwirtschaft, S. 12.
- 2) Derselbe, Mythus der Planwirtschaft, S. 8; Wesen und Grundbegriffe S. 48ff.
- 3) Derselbe, Wirtschaft und Wissenschaft S. 852.
- 4) Derselbe, a. a. O., S. 258, 581; Wesen und Grundbegriffe, S. 47; Läuterung des nationalökonomischen Denkens als deutsche Aufgabe, S. 11ff.
- 5) Derselbe, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 476ff.
- 6) Derselbe, a. a. O., S. 477ff.
- 7) Derselbe, a. a. O., S. 477, 771.
- 8) Derselbe, a. a. O., S. 771ff.
- 9) Derselbe, a. a. O., S. 772ff.
- 10) Derselbe, Wesen und Grundbegriffe, S. 49.
- 11) Derselbe, a. a. O., S. 50, 99; Läuterung usw., S. 89.
- 12) Derselbe, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 1164ff.
- 13) Derselbe, a. a. O., S. 479ff.



## V 若干の具體的問題

企業と國民經濟との關係に關する以上のごときゴットルの見解は、具體的問題に關する彼の所説において一層具體的に展開せられてゐる。それ故に我々はつきに、(一)合理化、(二)フォード主義、(三)計畫經濟、(四)獨逸國民社會主義の四問題に關する彼の所説を、企業と國民經濟との關係なる視角において分析することとする。

まづ第一に所謂「産業合理化」の問題に關してゴットルは、所謂「標語としての合理化」ではなく、「原理としての合理化」を説明してゐる。この原理としての合理化は、中世の手工業から近代産業への轉化以來の古き事柄である。そしてかかる合理化は、技術的合理化、商業的合理化、國民經濟的合理化なる三種類或はむしろ三段階に分たれる。まづ「技術的合理化」―生産の合理化―は、經營成果一單位當りの費用を減少し以つて生産經營の「經營性」Betriebswucht を増大せんとするものである。この技術的合理化は、企業の「収益性」Ertragswucht を増大せんとするものである。即ち「技術的理性」technische Vernunft は「商業的理性」kommerzielle Vernunft に從屬するものであるが、それはさらに

なほ「經濟的理性」wirtschaftliche Vernunft に從屬せねばならぬ。即ち「商業的合理化」はいはば經濟的合理化の下段であり、それはその上段たる「國民經濟的合理化」に從屬奉仕するものである。それ故に商業的合理化即ち企業の収益性の増大は、それによつて國民經濟的合理化即ち國民經濟の「生活力」Lebenswucht の促進を齎すかぎりにおいてのみ、國民經濟的意味を有つとせられる。我々はここに「企業と國民經濟との關係」に關するゴットルの理論が、國民經濟的合理化への商業的合理化の從屬といふ具體的なかたちにおいて現はれてゐるのをみる。

第二に我々は、所謂「フォード主義」に關するゴットルの見解を分析する。彼はまづ「フォードの精神における産業」の四原理を規定してゐる。即ち(一)生産は單一製品に限定される、―單一型産業 Eintyp-Industrie。(二)高賃銀・低價格 Preisabbau bei Überlohnem ―この「低價格における營利」Erwerb bei Tiefpreishaltung は、現代の營利生活の様式即ち「高價格における營利」Erwerb bei Hochpreishaltung に對する。(三)全收益の留保、―收益は分配されずに生産の擴張完成に當てられる。かような「産業利潤」の否定は生産のための生産は、「生産を營利のために、營利を資本利用のために行ふ」といふ現代の經濟生活の様式に對する。(四)生産の不斷の合理化、―この原理は經營における最高用役の原理―(人的側面)―及び全産業構成體の最高構成の



原理（物的側面）なる經營技術的原理に展開する。ゴットルのいふフォード的産業の四原理は以上のごとくであるが、かかる「フォード的産業」の基礎には「利潤意志」Rentenwilleによつてではなく、奉仕意志 Dienstwille. によつて培はれてゐるところの「企業的營利の理念」が横はつてゐる。そしてかかる理念が、一般化せられ、全經濟生活の改新者として考へられると、「フォード主義」なるイデオロギーを生ずるといふのである。そこでは企業は、生産を「利潤基礎」の上において行ふのではなく、「奉仕基礎」の上において行ふものである。かの「高價格における資本家的營利」は、計算的に「収益」の上に立ち、「利潤追求」に服しており、その窮極には「利潤意志」が立つてゐる。これに對比して「低價格におけるフォード的營利」は計算的には同じく収益の上に立つてゐるが、「収益努力」によつて擔はれており、その窮極には「奉仕意志」が立つてゐる。そしてゴットルによれば、かかるフォード主義による經濟生活の改新は、純粹に内面的であり、したがつて經濟生活の諸形態は何等變化しない。しかしながらかかるフォード主義によつて、「一般的給養状態」は向上する。また「一般への奉仕」の心情は、指導者及び従者を把へ、かくて「經營共同社會」Betriebsgemeinschaft が實現せられる。そして奉仕意志の心情は、經濟生活の中に「相互」の意味を齎すものである。かくてこのフォード主義は、深き心情的意味の「社

會主義」に等しくなる。それは「經濟的社會主義」の公式即ち「社會による・社會のための・經濟の指導」の第二部分たる「社會のための經濟の指導」にあたる。そこには「指導者社會主義」Führersozialismus — 共產主義の赤き社會主義に對して白き社會主義—が横るといふ。思ふに以上のごとき内容をもつ「フォード的産業」は、ゴットルにおける「國民經濟の目的構成體としての企業」の最も理想的な具體化形態であり、以上の意味における「フォード主義」は、彼の企業理論から必然的に導き出される典型的なイデオロギー的構想であると思はれる。

第三に所謂「計畫經濟」の問題に關してゴットルは、まづ現代の經濟生活において意味深く「計畫經濟」といふことを語り得る場合を探求する。そしてここで「指導規制」を分析し、指導規制と自動規制との關係を明かにしてゐる。即ち指導規制は、經濟への構成のための構成強制であり、強制經濟 Zwangswirtschaft — 計畫經濟的干與、或は部分的計畫經濟 Partielle Planwirtschaft. —といひ得られる。かかる指導規制の本來的使命は、現代の經濟生活の「修整者」Korrektur たることであり、その「變革者」Reformator ではない。またそれは自動規制の友として働くものであり、その敵たるものではない。かように指導規制の本來的意味は、自動規制の相手方として現れることであり、自動規制がその前提をなしてゐる。したがつて指導規制は自己目的ではな



く、またそれには上限が引かれてゐる。それ故に、人々のいふような「全部的強制経済」なる意味の「計畫経済」——全部的計畫経済——への發展なるものは、一の神話的望像にすぎぬとせられる。以上のごとくゴットルは、所謂計畫経済論者の神話的説明を批判し、そして國民経済の繁榮を樹木の繁茂に比喩をとつて、國民経済における改良・切斷・支持の三つを主張してゐる。即ち（一）諸々の地位を充たしてゐる人々の中に共同社會の感情が鼓吹せられねばならぬ。企業者の行爲は營利の新たな心情により擔はれ、個人的利益即ち利潤が斷念せられ、共同社會への奉仕がなされるべく、かくていはば「利潤なき資本主義」が生ずる。（二）誤れる強制経済は切斷せられ、現代の經濟生活の重荷たる「階級憎惡」が根絶せられねばならぬ。（三）すべての強制経済——指導規制の本來的任務は、經濟生活を正しく構成する道具として役立つことであり、變革的使命を有つ指導規制は、經濟生活の自然的成長を阻害し、それを殺すであらうといふ。以上のごとくゴットルは、企業的營利の支配と結びついてゐる「自動規制」を以つて國民経済構成の中心となし、變革的使命を有つ指導規制を内容とする「計畫経済」論を排撃し、經濟生活の改良のために「利潤なき資本主義」を提唱するのである。我々は、彼における企業と國民経済との原理的調和の思想がここにも現出してゐるのをみるであらう。

第四に所謂「獨逸國民社會主義」に關してゴットルは、經濟學的思惟の精練を獨逸的課題として提起し、「構成體理論的經濟學」と「國民社會主義」との内的一致を明かにしてゐる。即ち國民社會主義の「資本は經濟に奉仕する」といふ原理は、資本の利用を擔當せる企業は國民経済の目的構成體であり、したがつて資本は國民経済への奉仕において正しく利用されねばならぬといふ經濟理論と一致する。また國民社會主義の「公益は私益に優先する」[*Gemeinnutz vor Eigennutz*]といふ原理は、國民経済は經濟的最高構成體であり、包括構成體たる國民経済の生活力はその在內構成體の生活力に構成的に優位するといふ經濟理論と一致する。さらに國民社會主義の「經濟は國民に奉仕する」といふ原理は、「國民経済」はその意味上「國家」に從屬し、さらにそれと共に窮極的には「國民」に從屬するといふところの國民经济・國家・國民の構成的順位の經濟理論と一致する。なほ國民社會主義は、構成の變化を心情の變化に奉仕せしめ、このために獨逸社會主義の精神が國民経済を貫流せんがための新形態を作らんとしてゐるのであるが、かかる「秩序づける構成」即ち經濟生活への規制的干與は、經濟理論においては「公權力による指導規制」として意義づけられてゐるところのものである。最後に獨逸社會主義の現實は、その經濟的内容において、理論的に構想せられたところの「フョード主義」——「指導者社會主義」——の力強き具體化に



外ならず、「産業企業のみ中における社會主義」であるといふ。即ち獨逸社會主義においては「所有權」及び「自己責任」は經濟の基礎として保持せられ、ここでは企業なる形態は留まり、企業は國民經濟に奉仕すべきものであるとせられてゐる。以上のごとくゴットルによれば、彼の經濟理論は、現在の獨逸國民社會主義の主張と一致し、それにおいて完全な具體的形態を見出すのである。これによつて我々は、彼の企業理論から歸結されるところの理想社會の構想を具體的に見極め得るであらう。

以上において我々は、四つの具體的問題に關するゴットルの所論を分析した。そしてここにおける分析の意味は、具體的問題に關する彼の論議の正否を検討せんがためではなく、むしろこれを通じてこの小論の課題たる彼の「企業理論」の内容性格を一層明かならしめんがためである。けだし一の理論は、その抽象的形態においてよりも、實踐的問題への具體的展開において、自ら本體をより明白に露呈するものである。これによつて我々は、ゴットルの企業理論の具體的展開をしり得、且つゴットル理論の實踐的意義を審判し得る材料を看取し得るであらう。

- 1) Gottl, V. am Sinn der Rationalisierung.
- 2) Derselbe, Fordismus.

- 3) Derselbe, Mythos der Planwirtschaft.
- 4) Derselbe, Läuterung usw.
- 5) Derselbe, Zeitfragen der Wirtschaft.

## VI 批判的結言

ゴットルの經濟學は、「全時代全國民の經濟の學」Lehre von der Wirtschaft aller Zeiten und Völker たる意味の「全經濟學」Allwirtschaftslehre たらうとする。かかる意圖においてその經濟學理論は、經濟基礎論、經濟形態論、經濟構成論の三段階において組立てられる。

第一の基礎的段階の理論たる「經濟基礎論」Grundlehre von der Wirtschaft は、經濟における不變的なもの即ち「永遠の經濟」Ewige Wirtschaft の論である。このすべての經濟における不變的なものは、經濟の所謂本質的なものである。それは理性の強制によつて命令されるところのもの、即ち理性必然的 vernunftnotwendig なものであり、理性的に自明的なものであり、すべての經濟の不動の理性内實、不變的な根本内實である。第二段階の理論たる「經濟形態論」Formenlehre von der Wirtschaft は、經濟における可變的なもの即ち經濟の形態を取り扱ふ。經濟



における不變的なものは、かかる形態を着て實現するのである。そして經濟の特定の實例 Fall der Wirtschaft における諸形態の總體は、それに固有な「經濟體制」 Wirtschaftsverfassung を生ずる。經濟の各實例には特定の體制が存在してゐる。ところが經濟の多くの實例、特に時間的及び場所的に接近せる諸實例においては、その體制の中において同時的な諸形態は内的統一を有つ封鎖的全體に結合してゐる。これは特定の「經濟秩序」 Wirtschaftsordnung (例へば資本主義) である。それぞれ獨特の「體制」を有つところの經濟の實例は多數存在してゐるが、經濟の「秩序」の數は限られてゐる。この經濟秩序、即ち經濟構成の根本的特殊樣式の把握において、經濟形態論はその頂點に達するとされる。最後に第三段階の理論たる經濟構成論においては、不變的なもの基礎論と可變的なものの形態論とが意義深く結合せられる。それは、經濟秩序のかたちにおいて把握されるところの經濟を、その存在可能性 Daseinsmöglichkeit について研究する。これにおいては、その形態の變化にも拘らず經濟は如何なる様式において、つねにその理念—欲求と調達との持續調和なる精神における人間共同生活の構成たること—を實現するかといふ問ひが提起せられる。即ち經濟のすべての秩序に對して順次に、かかる秩序における經濟は如何にして可能であるか、と問はれる。例へば資本主義的經濟は如何にして可能であるかと。構成論

は、現實の經濟におけるすべての構成の相互作用を省察する。そしてこの經濟構成論は、經濟秩序の數にしたがつて分岐するとせられる<sup>1)</sup>。

さてみぎのような組成をもつゴットルの經濟學理論において、經濟基礎論は全理論の根底をなしてゐる。すべての經濟における不變的なものの把握が、經濟形態の研究及び經濟構成の研究において、その論理的前提、その理論的基礎を形づくつてゐる。かかる特徴は、彼の理論の至るところに現はれており、特に前述の企業に關する所説において明瞭に看取せられるであらう。即ち企業は可變的な經濟形態の一つであり、現代の國民經濟即ち資本主義的經濟は現代の經濟構成であるが、これらの企業及び國民經濟の理論は、經濟基礎論から論理的に導き出されたものとして現はれる。この意味において彼の企業理論は、現實の企業そのものの分析であるよりも、むしろ理性的な思惟形象としての企業の觀念的敘述の色彩を濃厚に有つてゐる。またその結果として、その企業理論はその内容において調和的思想を多分に含んでゐる。上來において分析した彼の企業理論の諸内容に對して、種々の疑問・批判が提起されるであらうが、これらの疑問乃至批判は、根本的には彼の理論における觀念的且つ調和的な思惟に對する批判といふことに歸着するであらう。我々はつぎにそれを簡單に指摘することとする。



ゴットルによれば、経済への構成の基礎には「経済への意志」が横はつてゐる。かかる「経済への意志」は理性的なものであり、それ故に経済への構成は「理性の強制」、「経済的理性」によつて支配せられてゐる。かかる経済への意志或は経済的理性の支配は、「永遠の経済」を貫流してゐる。永遠の経済即ち経済における不変的なものは、理性の強制によつて生ずるもの、理性必然的なもの、理性内実である。そしてゴットルにおいては、現実の経済構成は、かかる経済的理性の内実の基礎の上において組み立てられる。即ち現実の経済の諸内容は、「経済への意志」により理性的に導き出されたものとして現れる。(一)いま当面の問題たる企業についていへば、企業は「経済構成体の展開」において派生せられたものとして現れる。即ち「経済への意志」の支配に基いて経済構成体が展開し、この展開において企業なる目的構成体が一定用役を果すために構成するのである。そして企業は「経済への意志」から派生しその轉向と考へられるところの「營利への意志」によつて擔はれてゐる。かくのごとく企業は、國民経済の構造に奉仕する目的構成体として構成せるものと考へられ、企業は國民経済における「理性の子」として誕生せるものと思惟される。それ故にかかるすがたにおける企業は、その構造において理性的に構成せられ、また國民経済との關係においても理性的にその目的構成体たる本來的任務を果するものとして考へられ

る。(二)即ち企業の「構成的構造」は、理性的に作られたる「資本一及び「企業者」なる根本的備への基礎において、企業者の構成活動により理性的に構成せられるものとして現はれる。そして備へ—經營—企業の三段階的構成において、個人は地位の忠實な擔當者たる人格においてのみ現はれ、現實的人間における階級的利害的對立はすべて捨象せられ存せざるものとして考へられてゐる。そしてかかる構成的構造のいはば形式的圖式は、容易に「經營共同社會」なる調和的思想に道を拓くであらう。また企業者と労働者との關係は、行爲一般の抽象的な不變的區別としての「構成活動」と「労働」の問題として把握せられてゐる。そして企業者の構成活動は、経済に本質的不變的な構成活動の具體的形態たる第一次的意義をもち、労働は機械によつて代へられ得る第二次的なものとしてせられる。且つかの労働の質的悪化は、賃労働に根ざすといふよりも、むしろ労働一般の性質に歸着せしめられる。かくて目的構成体たる企業の構造は、「経済への意志」のいはば轉向形態たる「營利への意志」によつて理性的に構成せられた形象においてのみ考へられる。(三)かかる觀念的調和的思惟は、「企業と國民経済との關係」において最も明瞭に現はれる。即ち國民経済は「理性の狡智」に基く自動規制を中心として構成せられ、この自動規制は企業的營利の支配と結合して矛盾なく行はれるとせられる。企業と國民経済との原理的調和は、企業が



目的構成體としての三用役を理性的に遂行することによつて達せられるのである。そして企業のかかる任務の遂行は収益獲得をその基礎條件とするとせられ、且つ収益と利潤との現実的な必然的結合は、ただ思惟の上で觀念的に分離せられるのである。それ故にかかる企業と國民經濟との利害の背反のごときは、非理性的な恣意的なものに基づくところの一时的偶發的現象と考へられ、しかもかかる攪亂的現象は調節的任務をもつ指導規制によつて容易に矯正され得るものと考へられる。かくして「企業の營利の支配の下における大規模の流通經濟」としての現代の經濟生活は理想的な經濟構成像として考へられる。現實的存在そのものを分析するよりもむしろ理性的思惟形象を形づくり、さらには理性的思惟形象そのものを直ちに現實的存在そのもの或は少くもその本質的内容たるかのごとく見做すところのかかる觀念的思惟は、具體的問題の取扱ひにおいて自らを露はにしてゐる。即ち現實の合理化の代りに原理として合理化が問題とせられ、現實のフ・ード主義の代りに理念型的形象としてのフ・ード的産業・フ・ード主義が問題とせられ、現實の計畫經濟の代りに論理的に可能な姿における計畫經濟が問題とせられ、現實の獨逸經濟の代りに國民社會主義の理想的形象における獨逸經濟が問題とせられる。かくして事態はその現實的客觀的本質において分析把握もられることなく、逆に事態が思惟の上に觀念的に主觀的構成せられ、

且つそれ故に矛盾なき調和的な姿においてのみ思惟せられる。ゴットルの企業理論はまさにかか  
る觀念的調和的思惟の上に築き上げられたるものである。

1) Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, S. 39ff; Wesen und Grundbegriffe, S. 39ff.

(註) 拙稿「ゴットルの企業理論」(經濟學雜誌第三卷第六號)、「ゴットル企業理論の分析」(經營學論集第十三輯)、「技術的、商業的、國民經濟的合理化」(企業經營第五卷第三號)、「經營共同體」(經濟時報第八卷第一號)、「經營社會學の經營組織觀」(經濟時報第八卷第十一號)、「經營社會學の對象としての經營」(企業經營第六卷第二號)、「經營の社會學的現象」(企業經營第六卷第四號) 參照。



## 後篇 沒價值性的政策論分析

——マックス・ウェーバー政策論の究明——

### 1 沒價值性論

#### 〔1〕 沒價值性

沒價值性的政策論の典型・代表はマックス・ウェーバーの政策論である。ウェーバーは「國家と國民經濟政策」<sup>1)</sup>において、國民經濟政策の現實的性質をつぎのごとく明かにしてゐる。我々の國家制度は「國民國家」であるが、この國家の行ふ國民經濟政策にとつては、國民主義的價值判斷は決して感情的な偏見ではない。俗見によれば國民經濟政策は世界厚生の處方箋に關する思慮であり、人間存在の幸福貸借對照表の改善がその唯一目標とせられるのであるが、我々は幸福主義ではあり得ない。國民經濟政策の仕事は、將來の次の世代子孫に對する配慮であり、この意味において愛他主義的基礎に基くものであり、樂觀主義的幸福待望の基礎に基くものではな



い。そして我々が次の世代の中に育成せんとするのは、人間の安樂ではなく、人間の大きさと品格を形づくる人間性である。國民經濟學においては、財貨生産の技術的經濟的問題と財貨配分の所謂社會的正義の問題とが、交互に價值尺度として前面に出され、或は素朴的に同一視された。この際に半ば無意識的ながらも、人間の科學（國民經濟學はこれである）は、經濟的及び社會的存在條件によつて培育せられる人間性質を問題とするといふ認識が生じたのである。「説明的及び分析的科學」としての國民經濟學は國際的であるが、「價值判斷」を下すやそれは我々自身の本質中にある人間性の刻印と結びついてゐる。それ故に獨逸國家の國民經濟政策はただ獨逸的であり得るのみである。經濟的發展が國民的境界を超へて諸國民の包括的な經濟共同社會を樹立し始めてからも、みぎのことは變化しない。國民主義的價值判斷尺度も、國民經濟政策の國民的利己主義も、それによつて廢絶されない。經濟的發展過程も究極的には「權力」闘争である。國民の權力關心は國民經濟政策の奉仕すべき究極的且決定的關心である。國民經濟政策の科學は「政治的科學」である。それは政治の從者であり、國民の不斷の權力政策的關心の從者である。そして國民國家は國民の現在の權力組織であり、この國民國家においては、究極的價值尺度從つてまた國民經濟的考察の究極的價值尺度は「國家理性」である。獨逸國民經濟政策の問題に對する究極的且

決定的裁決權は、獨逸國家の經濟的及び政治的の權力關心とその擔當者たる獨逸國民國家に屬すべきである。いまや經濟的考察方法があらゆる領域の前面に出て來り、その獨自的觀點の意義の過重評價の危險が生ずる。即ち國民經濟學によつて單に人間の共同社會の本質の認識が擴大せられるのみならず、諸現象の評價尺度も全く新になり、政治經濟學がそれ自身の素材から「獨自的理想」を抽出し得るかのごとき考へが生ずる。しかしながら獨自的な經濟的或は社會政策的理想が存在するといふのは一の錯覺にすぎない。我々經濟的國民主義者にとつて唯一支配的な價值尺度は政治的價值尺度である。

以上、ウェーバーは現實の經濟政策の性質を明かにすると共に、その政策の目標・理想・價值尺度、從つてまた價值判斷は普遍的・客觀的であり得ないことを明かにする。政策目標・價值判斷のかかる主觀性よりして、科學的認識の客觀性のために沒價值性（Wertfreiheit）<sup>1</sup> 沒價值判斷性<sup>2</sup> 沒評價性が要求されるのである。科學の沒價值性に關するウェーバーの思想は、その諸論考の至るところに現れてゐる。我々はまづ沒價值性を主題としない諸論考に散在的に現れてゐる沒價值性論を要括することとする。

（一）「ローシャー及びクニースと歴史派經濟學の論理的問題」<sup>2</sup> においてウェーバーは「存在」



と「當爲」との區別を論じてゐる。即ち、存在と當爲との同一視は古典派の思惟方法の特徴であるが、存在と當爲と對立は最も始源的な對立である。經濟政策的格律の基礎であるところの「價值判斷」は、ただ主觀的意義を有ち得るのみであり、規範の科學的一義的な發見は拒絶される。また生成するものと有るべきものと倫理的なものとの歴史的混淆も、排斥されるべきである。日常生活の倫理の地盤においても倫理的命令の主觀的限界が存在する。價值判斷を含む前提は經驗の地盤をこえ、その上に基礎づけられ得ない前提である。評價の不存在といふ意味における「無前提的」な經驗的分析と、妥當すると前提された「價值」の觀點の下における文化發展の價值判斷とは區別されるべきである。所與の現實在の經驗的分析から、何等かの價值判斷の妥當性の肯定或は否認に架す橋はないのである。經驗的諸科學の研究方法及び研究成果が世界觀の建設に利用されるといふ現象があるが、これは科學的には許容され得ない。

(二)さらにウーバーは「シュタムラーの唯物史觀克服」及びその「追補<sup>3)</sup>」においても「存在」と「當爲」との區別を強調してゐる。即ち、存在と當爲とは判斷範疇の對立である。因果的説明と價值判斷、及び發展豫見と當爲とは絶對的な論理的異質性である。事實認識と事實評價とは區別されるべく、また個別の全體に對する事實的關係の科學的説明と、價值の世界即ち在るべき

世界への橋渡しとは區別されねばならぬ。一規範の理念的妥當と純事實的事柄とは、如何なる移行をも排除する對立であり、この對立は調訂し得ないものであり、この移行は概念的に思惟し得ないものである。それは認識の全く異なる設問と方向である。かかる論理的に絶對的に異質的な設問は混同されてはならぬ。

(三)また「封鎖的大工業の労働者の選擇及び適應(職業選擇及び職業運命)に關する社會政策學會の調査に對する方法論的序言<sup>4)</sup>」において、ウーバーは實證的研究における沒價值性を論じてゐる。即ち、この調査は科學的目的に役立つ研究たらしめ、實踐的な「社會政策的」傾向からは離れており、その目的は「純社會科學的」な目的である。大工業における社會關係は如何に價值判斷せらるべきか、近代的大工業が労働者を投げこんだ状態が喜ばしきものであるか否か、何人がその状態の不快感に對して責任を負ふのであるか、それについて如何なる改良がなされるか、また如何なる方法で改良されるかといふ諸問題は、ここでは取扱はれない。ここでは事實の當體的及客觀的確定と、大工業の存在條件及び労働者の特性の中に存するその原因の發見とが取扱はれる。またこの調査によつて利害關係者即ち企業者或は労働者を道德的に審判する材料を提供しようとは考へない。利害關係者を道德的に審判する意圖を以つてしては、研究の科學性



は何等の益も得ない。ここで取扱はれる全問題はその性質上、社會政策的に全く「中立的」なものである。今回の調査はこの意味における「理論的」目標を追求する。

(四)「一九〇九年度社會政策學會大會における國民經濟の生産性に關する討究に對する討論」<sup>5)</sup>において、ウェーバーは「國民經濟の生産性」の概念に關聯して没價值性を論じてゐる。科學的問題の中に當爲が混淆することは許されない。經驗科學は存在の地盤の上にあるものであつて、當爲については何ものべぬ。「生産性」なる概念は科學と價值判斷とが混合される最も悪い場合の一である。「國民經濟的生産性」の概念において、多くの異なる問題が取扱はれ、そして標準尺度として妥當すべきとされる「平均判斷」、當爲に關する平均判斷が構成されがちであるが、これは誤りである。一部の人々は、社會生活の動因としての「貨幣追求」を取扱ふ科學は、この貨幣追求を價值判斷の唯一尺度とせねばならぬといふ誤れる先入見に囚はれてゐる。また他方では、科學と價值判斷との混淆を排撃する人々の間にも素朴的な誤謬を犯すものがある。即ち、貨幣追求なる價值判斷の唯一的妥當性を否認せんがために、貨幣への個人的努力の外に、人間の行爲における他の原因を經濟に相關的なものとして證明せんとする。しかしこれにおいても科學的研究と價值判斷とが密接に混淆せられ、事實及びその聯關の確定によつて當爲に關する判斷を支持せん

と試みられてゐる。以上のごとくウェーバーは存在と當爲との峻別を強調し、つぎに經濟學における「生産性」概念の使用可能な場合を積極的にのべてゐる。生産性なる概念は今日の經濟生活においては資本主義的經營の私的簿記の中にその座席をもつてゐる。そこでは生産的支出と生産的支出とが區別せられ、そして不生産的支出には通例は筋肉労働者の賃銀費用以外のものが計上される。所謂不生産的支出即ち運轉力、工場及び機械器具の費用、補助労働者・マスター・帳簿係・經營事務員・經營管理人の賃銀或は俸給等は、すべて生産的賃銀に對する附加分として計算される。かくて特定労働者の肉體的労働のみが「生産的」として取扱はれる。蓋しかくしてのみ費用の計算が、經營の關心事たる正確性といふことを相對的最大限度にまで獲得し得るからである。さらに、生産性概念が私經濟から離れて一般的に觀察せられる場合においても、それは私經濟におけると同様の場所にその座席を見出す。生産性概念は所謂國民經濟的費用の論においても私經濟におけると同様の座席に屬する。それは決して階級の政治的或は社會的「價值」の論或は公共の利害に對する具體的營利事業の意義の評價の中に屬するのではない。一般に生産性概念が用ひられ得んがためには、費用と収益との關係が經驗的一義性でもつて計算され得なければならぬ。道徳的なもの或は公共福祉に役立つものについての純主觀的意見においては、費用と収益と



の計算可能性は全然存在しない。科學的な生産性概念の使用可能の場合には右の如くである。

以上、ウェーバーの諸論考に散在的に現れてゐる没價值性の主張、特に存在と當爲との區別、科學と價值判斷との區別の強調を考察した。「ロッシヤ」及びクニースと歴史派經濟學の論理的問題」及び「シ・タムラーの唯物史觀克服」及「追補」においては、没價值性が論理的に主張されており、「封鎖的大工業の勞働者の選擇及び適應に關する社會政策學會の調査に對する方法的序言」においては、没價值性が科學的實證研究との聯關において主張されており、「一九〇九年度社會政策學會大會における國民經濟の生産性に關する討究に對する討論」においては、没價值性が生産性概念との聯關（概念構成の問題）において主張されてゐる。かくのごとくウェーバーの「没價值性」論は方法的論理・概念構成・實證的研究のすべてに現はれてゐるのであるが、それは彼の論考「社會科學的及び社會政策的認識の客觀性」<sup>6)</sup>及び「社會學的及び經濟學的諸科學の没價值性の意味」<sup>7)</sup>において統一的原理的に考究せられ、さらに「職としての學問」<sup>8)</sup>及び「職としての政治」<sup>9)</sup>において聯關的に主張せられてゐる。以下これらの諸論考における諸主張を問題別に整理検討することとする。

## 〔2〕科學的可能範圍

ウェーバーによれば科學的認識（客觀的）と價值判斷（主觀的）とは異質的なものであり、嚴密に區別されねばならぬ。ここにいふ「價值判斷」とは、社會的事實を倫理的觀點或は文化的觀點或は他の根據から實踐的に望ましきもの或は望ましからざるものとする「實踐的評價」を意味する。そして科學の「没價值性」とは、かかる實踐的評價からの自由（解放）を意味する。即ち没價值性とは没價值判斷性・没評價性の意味である。それ故に没價值性要求とは、經驗的事實の確定と實踐的に評價する態度決定とは異質的問題であるが故に兩者を分離すべきであるといふ要求である。ではかかる没價值性的科學（經濟學）において、經濟政策・社會政策・價值判斷は如何なる意味限度において科學的考察の對象となるのであるか。これに關してウェーバーはつきのごとくべてゐる。

人間行爲の究極的要素への思惟的反省は、まづ「目的と手段の範疇」に結びついてゐる。人間は或るものを、それ自身の價值のために、或は究極において意欲されたものとして意欲する。〔一〕まづ與へられた目的における「手段」の適合性の問題が、科學的考察に可能である。またこれによつて逆に特定手段で以つて特定目的を達成する機會・可能性を商量し得べく、かくて



間接に目的定立自體をそれぞれの歴史的状況に基いて、實踐的に意味あるもの或は意味なきものと批判することができる。(二)つぎに前提目的の達成の可能性が與へられるならば、必要な手段の適用が、すべての生起の全聯關の結果、意圖された目的達成の外に惹起するところの「副結果」を確定することができる。かくて科學は行爲者に、その行爲の意欲された結果と意欲されない結果Ⅱ「副結果」との商量の可能性を提供し、そして意欲された目的の達成が他の價値の損傷といふかたちにおいて何を犠牲にするかといふ問への答を提供する。責任的に行爲する人間の自省は行爲の目的と結果との商量を廻避することを得ず、そしてこの商量を可能ならしめることは「技術的批判」の最も本質的な機能の一である。しかしながらこの商量自體を決定することは、もはや科學の可能的課題ではなく、「意欲する人間」の可能的課題である。彼は彼自身の良心と個人的世界觀とに従つて諸價値を評量し選擇するのである。(三)さらに科學は「意欲されたもの」自身の意義の知識を提供し得る。科學は、具體的目的の基礎に横つてゐる「理念」の指示及び論理的展開によつて、意欲する人間の諸目的をその聯關及び意義について教へることができる。この理念を精神的理解に持ち來たすことは、人間の文化生活の各科學の最も本質的な課題の一である。このことは經驗的現實在を思惟的に整序づけるところの科學の限界を超へるものではない。

(四)價値判斷の科學的取扱ひは、意欲された目的及びその基礎に横つてゐる理想を單に理解し追體驗せしめるのみならず、さらにそれを批判的に價値判斷することを教へることができる。この批判は歴史的に與へられた價値判斷及び理念の中に存在してゐる材料の形式論理的價値判斷、意欲されたものの内的無矛盾性の要請に照しての理想の吟味である。これによつて批判は、意欲者の意欲の内容の基礎に横つてゐる究極的公理、彼が無意識的に出發するところの「究極的價値尺度」を自省することを得せしめる。具體的價値判斷に現れるこの究極的尺度を意識に持ち來たすことは、批判が思辯に陥ることなくしてなし得る最後のものである。このことは經驗的な思惟活動ではなく、論理的な思惟活動である。しかしながら判斷主體がこの究極的尺度を承認すべきか否かは、彼の個人的事柄であり、彼の意欲と良心との問題であつて、經驗知識の問題ではない。以上のごとく、經驗科學は何人にも彼が何をなすべきか(當爲)を教へ得ない、ただ何をなし得るか(技術的批判)及び何を意欲するか(論理的批判)を教へ得るのみである。

以上のごとく、ウェーバーによれば實踐的政策的(特に經濟政策的及び社會政策的)評價の領域において、「經驗的」科學は(一)不可避的手段、(二)不可避的副結果、(三)諸評價相互のその實踐的結果における衝突、の三を示し得る。「哲學的」科學はさらに進んでその思惟手段で以つて、



評價の究極的意味即ちその究極的の意味的構造及び意味的歸結を發見し、究極的諸價値の全體内におけるその場席を指示し、その意味的妥當領域を限界づけることができる。しかしながら如何なる程度において目的が不可避的手段を神聖化すべきか、如何なる程度において意欲されない副結果が考慮に入れらるべきか、具體的に衝突する數箇の目的間の闘争が如何に調訂されるべきかといふ問題は、選擇と妥協の事柄であり、これに對して科學（合理的或は經驗的）的方法は決定を與へ得ない。

ウェーバーはみぎの見解をまた「價值論議」||「實踐的評價に關する論議」としてつぎのごとく要結してゐる。(一)相對立せる諸意見が出發するところの究極的な論理一貫的な價值公理の指示（これは經驗的科學の手段によるものではなく、また事實認識ではなく、論理學と同様な様式において妥當するものである）。(二)特定の究極的價值公理が事實的事態の實踐的評價の基礎とせられた場合、それから導き出されるところの評價的態度決定に對する歸結の演繹（これは論議に關しては純粹に意味的であり、實踐的評價に對して考察中に入り來る經驗的事態の十全的な決疑論に對しては經驗的決定に結びついてゐる）。(三)特定の態度決定の實際的遂行が、特定の不可避的手段への結びつき及び特定の直接に意欲されない副結果のために生ずるところの事實的結果

の確定。この純經驗的確定は次のことを示し得る。A 遂行方法が發見されないことによる價值要請の遂行の絶對的不可能性、B 同様の理由或は直接間接に遂行を疑問的ならしめる意欲されぬ副結果の發生によるその遂行の疑問性、C 實踐的要請の主張者が考慮に入れてゐなかつたところのかかる手段或は副結果を考慮に入るべき必然性、かくて目的・手段・副結果の間の彼の價值決定が彼自身にとり一の新たな問題となる。(四)彼自身の價值要請の遂行が他のものと原理上（意味上）或は實際上において衝突する場合、實踐的要請の主張者が考量してゐなかつたところのこの新たな價值公理及びそれから結果する要請。以上、價值論議・實踐的評價に關する論議が科學的になし得ることがらについてのべた。しかし實踐的評價の論議の効用は、かかる直接的結果につきるものではなく、それは經驗的研究に對して問題提起をなすことによつて、經驗的研究を充實さすものである。一般に經驗的科學的研究に方向を指示するものは文化關心即ち價值關心である（所謂價值關係付け）が、この價值關心はみぎの價值論議（實踐的評價の論議）によつてその決疑論において展開され得るのである。この價值論議は科學的研究者特に歴史的研究者に對して「價值解釋」（一定の現象に對する可能的な意味的態度決定の展開）の課題を容易ならしめるものである。



以上のごとく、ウェーバーは科学Ⅱ没價值的科学の限界を明かにした。經濟政策・社會政策・一般に價値判断の科学的考察はみぎの限界内においてのみ可能であり、この限度を超へては科学的認識の客観性が損傷せられる。その根本的理由は存在と當爲、科学と價値判断の原理的區別に存する。客観的認識を目指す科学に對して没價値性を要求する理論的根據は以下のごとくである。

### 〔3〕 没價値性の根據

ウェーバーによれば、一論議が人間の感情及び具體的目標或は文化形式・文化内容のために人間を感動さす人間の能力に依據するか、或は倫理的規範の妥當の問題の場合であるならば人間の良心に依據するか、それとも經驗的眞理としての妥當を要求する仕方において經驗的現實を思惟的に秩序づける人間の才能に依據するかは、永遠に架橋し得ない一の區別である。社會「科学」(Ⅱ事實の思惟的整序)と社會「政策」(Ⅱ理想の主張)とは區別されねばならぬ。思惟する研究者と意欲する人間とは區別さるべく、理論と感情とは區別されねばならぬ。事實の科学的究明と價値的推理との混淆は最も有害である。以上のごとく、經驗知識と價値判断とは原理的に區別さるべく、科学と信仰との境界線は明かにされねばならぬ。社會科学的認識の客観性は、經驗的所與が社會科学的認識に認識價値を賦與するところの價値理念に照して整序せられ、その意義におい

て價値理念から了解せられるが(理論的價値關係付)、しかし價値理念の妥當の經驗的に不可能な説明の脚臺とせられないといふことに依存してゐる。

さらに換言していへば、純論理的に推理し得べき或は純經驗的な事態と、實踐的・倫理的・或は世界觀的評價とは區別される。純論理的に推理された或は純經驗的な事實確定と實踐的評價とは、別異の二領域であり、この區別を明かにすることは知的誠實の命令である。また科学的客観性は、種々な評價相互の商量及びその間の政治的妥協によつて得られるものではない。「中間線」は最極端な評價と同様に、經驗科学の手段では科学的に證明され得ず、また規範的に一義的でない。實踐的命令の規範としての妥當と經驗的事實確定の眞理としての妥當とは、全く異質的な平面に横るものであり、これを誤認し兩領域を合一せんとするならば、兩者の各特殊の權威が損傷されるのである。

以上、存在と當爲、科学的認識と價値判断、眞理と規範との異質性・區別を明かにしたが、ウェーバーはさらにこの點においては倫理學・倫理的命令も同様であることをのべてゐる。即ち、倫理的なもの「實證的」科学即ち倫理的確信の事實的影響の指示は、妥當すべきものについてのみ得る倫理學を生ずるものではない。また特定の評價的立場の個人的社會的歴史的制約性につ



いての経験心理學的及び歴史的研究は、その評價的立場を了解的に説明すること以上に出ない。これらによつて、何等かの規範的倫理學或は一般に何等かの命令の拘束性が獲得されるものではない。さらに「倫理的命令」と「文化價值」・最高の文化價值との同一視（これはシュモラーの見解の中に存する）は誤りである。蓋し倫理的命令と不可避的な對立關係にある文化價值もあり得べく、また逆にすべての文化價值を拒否する倫理的命令も內的矛盾なしに可能であるからである。この二つの價值領域は異なるものである。

さらにウェーバーはこれに關聯して倫理學の限界を検討してつぎのごとくべてゐる。倫理學によつて一義的に決定され得ない問題に、「正義」の要請の諸結果が屬してゐる。これは倫理的前提から裁判され得ない。大抵の社會政策問題の倫理的問題はこれに屬する。しかし個人的行爲の領域においても、倫理學が自己の前提から裁決して得ない倫理的根本問題が存在する。それには殊に、倫理的行爲の自己價值||純粹意志・「心情」のみがその行爲を正當づけるべきか、或は行爲の豫見される結果に對する「責任」が共に考量されるべきかといふ根本問題が屬する。社會的領域においては、すべての急進的に革命的な政治的態度（就中サンデカリズム）は第一の要請から出發し、すべての「現實政策」は第二の要請から出發する。兩者とも倫理的格律に訴へる。しかしこ

の二格律は、倫理學自體では裁決して得ない永久的不和の關係にある。これを要するに、倫理的に方向づけられたすべての行爲は、根本的に異なる二格律の下に立ち得る。即ち「心情倫理」或は「責任倫理」の二格律である（しかし心情倫理は無責任に等しく、責任倫理は無心情に等しいといふのではない）。そして心情倫理的格律の下に行爲するか或は責任倫理的格律の下に行爲するかは、一の深き對立である。さらに善き目的の達成が屢々倫理的に悪しき或は危険な手段及び副結果と結びついてゐるが、如何なる倫理も、何時且つ如何なる範圍において倫理的に善き目的が倫理的に危険な手段及び副結果を神聖化するかといふことを決定し得ない。かくのごとく、心情倫理と責任倫理とを統一することは不可能であり、また如何なる目的が如何なる手段を神聖化するべきかを倫理的に判決することも不可能である。

心情倫理と責任倫理との二格律の對立についてはみぎのごとくであるが、なほこの二つの倫理的格律は形式的性質のものであり、そのかぎりにおいて「實踐理性批判」の公理に似てゐる。この後者はその形式的性質の故に、行爲の評價に對する内容的指示を含まずとせられるが、それは當らぬ。蓋し他人を「手段として」のみ取扱ふことを否定する立場の反對は、(一)倫理外的の獨立的價值領域の認定、(二)この價值領域に對する倫理的領域の限定、(三)倫理外的價值のための行



爲にも倫理的權威の差異が附着し得るといふことを含んでゐる。かくて他人を手段としてのみ取扱ふことを許容或は命令する價值領域は、倫理に對して異質的である。かくのごとく實踐理性批判の倫理的命題の「形式的」性質も、行爲の内容に對して無關係ではない。これによつても明かな如くともかく、すべての聖或は善、倫理的或は美的法則性、文化意義或は人格評價に對立し、しかもそれ自體の内在的權威を要求するところの一領域を構成する見解が存在する。そしてこの見解は「科學」の手段で以つて説明することもできず、亦否定することもできない。

以上のごとくウェーバーは、文化價值と倫理的命令との區別、倫理的格律自體の對立、諸價值領域の存在を明かにし、そしてその歸結として一義的價值體系・一神論を否定し、價值闘争説・多神論に到達してゐる。彼によれば、かかる事態の經驗的考察は、ミルのいへることく、かかる事態に對應した唯一の形而上學としての「絶對的多神論」の認知に導く。意味解明的考察即ち價值哲學はさらに進んで、價值の如何なる概念體系もかかる事態の決定的な點に對して適應し得ないことを認知する。諸價值の間には單に二者選一のみでなく、神と惡魔との間におけるごとき死闘が行はれており、これらの間にはその意味上如何なる相對化も妥協も存在し得ない。教會の教義によつて一義的に規定された價值階梯以外には、かかる事態を否決し得る立場は存在しない。

それ故に、與へられた目的に對する手段の討究の場合以外においては、實踐的態度決定の「科學的」代表は不可能である。世界の種々な價值秩序は解決し難い闘争中に立つが故に、それは原理的に無意味である。經驗から出發すれば多神論に到達する。種々の神々は互に闘争し、しかも永久に相争ふてゐる。そしてこの神とそれらの闘争とには運命が支配し、如何なる科學も支配しない。基督山上の教訓の倫理を「科學的に否定」せんとするものはないであらう。ここに説かれてあるものは「無威嚴」の倫理である。この倫理が齎す「宗教的威嚴」と「男子の威嚴」とが選擇されねばならぬ。各個人の究極的態度決定の如何にしたがつて、一は神であり他は惡魔である。そして各個人は、彼にとつて何れが神であり何れが惡魔であるかを自分で決定せねばならぬ。トルストイは、科學は人間は何を爲すべきか如何に生活すべきかを教へ得ない故に無意味であるといつたが、科學はまさにかかる問題を教示し得ない。今日の科學は、事實的聯關の自省と認識とのための専門的に營まれる職分であり、救世財及び啓示を施與する豫言者の施物でもなければ、世界の意味についての賢者及び哲人の思慮の一成分でもない。このことは今日の科學の歴史的地位の脱却し得ない所與である。かくてウェーバーによれば、「沒價值的科學」は現代の科學に與へられた規定である。



## 〔4〕 若干の誤謬批判

科學・經濟學における沒價值性の主張は、評價的態度を含むところの諸經濟理論に對して當然に批判の矢を向ける。ウェーバーはつきのごとく批判してゐる。經濟學は歴史的にはまづ實踐的觀點から出發した。國家の特定の經濟政策に關する價值判斷を生み出すことが、その第一次的・唯一の目的であつた。それは臨床醫學と同様な意味において「技術」であつた。この状態は漸次に變化したが、「あるもの」と「あるべきもの」との認識の原理的區別はなされなかつた。この區別を阻げた意見の一は、不變的に同一な自然法則が經濟的過程を支配し、かくて「あるべきもの」が「不變的にあるもの」と一致するといふ意見であり(古典派經濟學)、ついでその二は、一義的發展法則が經濟的過程を支配し、かくて「あるべきもの」が「不可避的に生成するもの」と一致するといふ意見であつた(歴史派經濟學)。さらに、歴史の意味の覺醒と共に經濟學において倫理的發展論と歴史の相對主義との結合が支配し、それは倫理的規範からその形成的性質を剝奪し、諸「文化價值」の全體を「倫理的なもの」の領域に引入れることによつて倫理的なものを内容的に決定し、かくして經濟學を経験的基礎の上に立つ倫理的科學の威嚴にまで高めようとした(倫理派經濟學)。しかしそれは諸文化理想の全體に倫理的なものの刻印を捺すことによつて、

倫理的命令の特殊の威嚴を消散せしめ、しかも諸文化理想の妥當の客觀性に對しては何等得るところがなかつた。今日においても、經濟學は特殊な經濟的世界觀から價值判斷を生産すべきであるといふ不明瞭な見解が行はれてゐる。しかしながら、實踐的處方箋を導き出し得んがための拘束的規範及び理想を發見することは、決して經驗科學の課題であり得ない。その素材から理想を生み出し或は一般的倫理命令をその素材の上に適用することによつて具體的規範を生み出すべきところの「倫理的」經濟學への信奉は、拒否されるべきである。諸價值の妥當を價值判斷することは信仰の事柄であり、世界及び人生の意味の思辨的考察及び解明の課題であるが、決して經驗科學の對象ではない。

經濟政策及び社會政策の實際的個別的の問題においては、すべての人々が自明的なものとして與へられた或る目的から出發してゐるような諸問題が多數にある。例へば緊急信用、社會衛生、救貧制度、工場監督、工業裁判所、勞働紹介、勞働保護立法等の場合においては、少くとも外見上はただ目的達成のための手段が問はれてゐるだけである。しかし規制的價值基準の自明性のかかる假象も、慈善・警察的な福利施設及經濟施設の具體的問題から進んで經濟政策及社會政策の問題に至るや、忽ち消失する。一問題の社會政策的性格の特徴は、確定目的からする單なる技術的



考量に基いて處理され得ず、問題が一般文化問題の領域に入りこんでゐるが故に規制的價值基準そのものが争はれるといふ點にある。そして階級利益の間において争はれるのみならず、世界觀の間においても争はれる。取扱ふ問題が一般的となりその文化意義が廣汎になるにしたがひ、經驗知識からの一義的解答は益々得られなくなり、信仰及び價值理念の究極的公理が益々作用するのである。

それ故に實際的個別問題に對する規範を一義的に演繹し得る「一原理」を樹立し、その妥當性を科學的に確證することが社會科學にとつて特に必要であると信ずるのは、一の素朴觀である。一般的に妥當する究極的理想のかたちにおいて諸問題に對する實踐的公分母を創造することは、社會科學の課題でもあり得ず、また一般に經驗科學の課題でもあり得ない。それは實際的に解決され得ないのみならず、それ自體において反意味的である。さらにまた、倫理的命令の拘束性の基礎及び性質が如何に解明されようとも、「倫理的命令」からは當爲されたものとしての「文化内容」は一義的に演繹され得ない。ただ「既成宗教」即ち教義的に拘束された宗派のみが、文化價値の内容に無條件的に妥當する倫理的命令の威嚴を賦與し得る。それ以外にあつては各個人が實現せんと欲する文化理想と各個人が實行すべき倫理的義務とは、原理的に異なる權威をもつもの

である。世界觀は決して經驗知識の産物であり得ず、そして人間を最も力強く動かす最高の理想は、永久に他の理想との闘争においてのみ遂行されるのである。發展史的相對主義の成果たること多きところの「樂觀論的混合主義」のみがこの事態の力強く嚴肅さを理論的に欺瞞し去るか、或はその結果を實際的に迴避し得る。實際的政策家にとつては諸意見の對立を調停することが義務であるが、これは科學的客觀性と何の關係もない。「中間線」は左右兩極の黨派理想よりも髪一筋だに多く科學的眞理たるものではない。數個の黨派の見解の綜合、或はその對角線上において、科學的妥當性ある實踐的規範を獲得し得るといふは、重大な自己欺瞞である。それはそれ自身の價值尺度を相對主義的に隱蔽しがちであるが故に、黨派の教義の科學的證明可能性への古き素朴的信仰よりも遙かに危険なものである。

以上のごとくウェーバーは、諸經濟學者の見解における存在と當爲との混合を指摘・批判してゐる。そこでは當爲と不變的なものとの混合、當爲と不可避的生成との混合、文化的當爲と倫理的命令との混合が指摘・批判せられ、そして經濟學における價值判斷・實踐的評價の見解が排撃されてゐる。さらにウェーバーは、發展傾向から價值判斷を導出する見解を批判し、また經濟學における進歩概念の分析によつて評價の混入を批判し、且つ純經濟的評價の意味・限界を批判的



に明かにしてゐる。その各要點はつきのごとくである。

まづ「發展傾向」と價值判斷との關係についてみる。實踐的評價に對する指示を「發展傾向」から導き出すべきであるといふ見解が存してゐる。しかしながら如何に一義的な發展傾向からも、行爲の一義的命令は態度決定自體に關しては得られない。各個人が一義的發展傾向の認識に照してその實踐的評價の實現性の希望を抛棄すべきか否かは、各個人にとつて絶えず生ずる問題ではある。しかしかかる多少共に可變的な「發展傾向」の認識は、この點において特殊の地位を占めるものではない。個々の新事實の結果、目的と不可避的手段、意欲された目的と不可避的副結果との間の調整が新に行はるべきである。しかしこの調整が行はるべきか、また如何なる判断で行はるべきであるかは、經驗科學のみならず、一般に科學の問題ではない。大體において人間は、その理想實現の手段、理想實現の努力の程度、或は理想自體の抛棄において、成果或は成果を約束するものに内的に適應せんとする強い傾向を有つてゐる。獨逸においてそれは「現實政策」なる名稱で修飾されてゐる。しかしながら經驗科學は、その時々「發展傾向」を歓迎し、その發展傾向への「適應」を科學的權威をもつ原理とすることはできぬ（それは各個人の良心に歸着せしめらるべき評價問題である）。一般に成果多き政策は「可能的なもの術」であるといふこと

は正しい。しかし同様に、可能的なものは屢々不可能なものを獲んとすることによつて達成されるといふことも正しい。文化の積極的な特殊の性質を形成したものは、「可能的なものへの適應」なる倫理ではない。行爲の「成果價值」と並んでその「心情價值」が存してゐる。心情價值を基準とする行爲を、その成果價值と對質せしめて批判することは論理的にも無意味である。

つぎにウェーバーは社會學及び經濟學における「進歩」概念について分析してゐる。一過程を合理的進歩として特徴づける場合に、(一)單に分化する「前進」といふ意味、(二)手段の技術的合理性の増大といふ意味、(三)價值向上といふ意味の三意味における「進歩」が屢々混合せられてゐる。まづ主觀的に合理的な行爲は、合理的に正しい即ち客觀的に科學的認識にしたがつて正しい手段を適用する行爲と同一ではない。即ち行爲の前進的な主觀的な合理化は、必ずしも客觀的に合理的に正しい行爲における進歩ではない。また正しい手段の適用における各進歩は、主觀的に合理的な意味における進歩によつて獲得されるものではない。主觀的に前進する合理的行爲が客觀的に「合目的」な行爲に至るといふことは、數箇の可能性の一にすぎず、ただ蓋然的に期待さるべき過程である。しかしながら手段甲が結果乙に對する唯一の手段であり、一行爲がこれを適用するならば、その行爲は「技術的に正しく」方向づけられてゐる。人間の行爲がこの意



味において以前よりも技術的により正しく方向づけられるならば、その場合には「技術的進歩」が存する。かくてこの意味において、一義的に與へられた目的において手段における「技術的」正當性及び「技術的」進歩なる一義的に確定され得る概念が存する（ここでは「技術」はあらゆる領域における合理的行爲一般といふ最廣義においてである）。さらに欲望、すべての欲望自體とその主觀的評價、經濟秩序の所與様式が前提せられ、ただ欲望充足における持續・確實性・或は大小が問題となる場合においてのみ、所與の手段における欲望充足の相對的な最適度への「經濟的進歩」が存在し得るのである。

さてみぎのことから一義的な「純經濟的評價」の可能性を導き出す試みがなされる。その適例はリーフマンが生産原價以下の消費財を生産者の収益性關心において否認する場合のごときであり、この否認は客觀的に「國民經濟的に正しい」と評價されるといふのである。しかしながらこれは、自明的でない一連の諸前提を自明的と假定してある。第一にそれは、各個人の關心が單に事實上その死後にも及ぶといふのみならず、その死後にも及ぶべきものと假定してあるが、これは存在から當爲への侵入である。第二にそれは、市場原理の支配の下において諸營利部門における資本及び勞働の収益性關心よりみたる最適度の配分にも拘らず、さらにはそのために或る消費

者層の財貨供給を悪くする可能性を生ずるところの「階級状態」の事實を無視してある。第三にそれは、諸政治的統一體の成員間の利害對立を無視し、先天的に「自由貿易論」に加擔してあるが、この自由貿易論は當爲としては非自明的な評價である。以上のごとく、(一)嚮導目的として具體的欲望をもてる具體的人間の持續的な収益性關心、(二)自由な市場交換を通じての私的資本家的な欲望配慮の支配、(三)單なる法律保證としての公平な國家行力の三つが前提される場合においてのみ、リーフマンの見解は正しい。蓋しその時は評價は、財貨配分の技術的な個別問題の最適度の解決のための合理的手段に關するからである。しかしながら、純粹經濟學の理論的に有用なかかる假設は、現實の事實の實踐的評價の基礎とはなり得ない。經濟的目的及び社會的機構條件が與へられており、ただ數個の經濟的手段の選擇が問題であり、且つ手段が専ら成果の確實性・速度・數的大小に關してのみ異なる場合（他の諸點では同一）においてのみ、評價は一義的であり得る。その時には一手段は現實的に「技術的に正しいもの」として評價され得べく、この評價は一義的である。かかる純技術的でない場合においては評價は一義的たることをやめ、純經濟的に決定され得ない評價が關與するのである。かくて經濟學における正當な進歩概念は、技術的なもの即ち一義的に與へられた目的に對する手段に關するものである。一般に經濟理論は、純經



濟的關心の支配を假定し、そして行爲の權力政策的及びその他の經濟外的な方向づけを排除するものである。經濟理論の方法論的手段たるこの意味における沒國家的・沒道德的・個人主義的な純粹理論を、急進的自由貿易論者は自然的な現實在の十全的模寫として、且つ當爲として把握する。しかし、これは存在と當爲との混合である。一般に沒價值性≡沒評價性は、政策殊に社會政策及び經濟政策の純科學的取扱ひの前提である。經濟政策的成果甲に對して乙が唯一或は最有效の手段であるといふ型の命題を展開することは、科學的に可能・有用・必要である。追求されるもの自體の一義性が存する場合には、因果命題(原因・結果)の倒逆的轉換(手段・目的)、そして純技術的な問題が取扱はれてゐる。「原因及び結果」に關する立言の「手段及び目的」に關する立言への轉換は、取扱はれる成果の一義的な場合には可能である。以上、諸經濟學者の評價的態度に對するウェーバーの批判についてのべた。

- 1) Max Weber, Nationalstaat und Volkswirtschaftspolitik (Gesammelte politische Schriften)
- 2) Roscher und Knies und die logische Probleme der historischen nationalökonomie. (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre)
- 3) R. Stammers Überwindung der materialistischen Geschichtsauffassung (Wissenschaftslehre); Nachtrag

- zu dem Aufsatz über R. Stammers Übersetzung usw. (Wissenschaftslehre).
- 4) , Methodologische Einleitung für die Erhebung des Vereins für Sozialpolitik über Anlese und Anpassung (Berufswahl und Berufschicksal) der Arbeiterschaft der geschlossenen Grossindustrie (Gesammelte Aufsätze zur Soziologie und Sozialpolitik).
  - 5) , Debattereden auf der Tagung des Vereins für Sozialpolitik in Wien 1909 zu den Verhandlungen über die Produktivität der Volkswirtschaft. (Soziologie und Sozialpolitik)
  - 6) , Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis (Wissenschaftslehre).
  - 7) , Der Sinn der Werfreiheit der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften (Wissenschaftslehre).
  - 8) , Wissenschaft als Beruf (Wissenschaftslehre).
  - , Politik als Beruf (Gesammelte politische Schriften).

## II 沒價值性論批判

### [1] 存在と當爲

ウェーバー沒價值性論の一理論的基礎は、リッケルトの科學方法論における「理論的價值關係付」と「實踐的價值判斷」との區別である。<sup>1)</sup>リッケルトによれば、歴史的素材の選擇及びすべて



の歴史的概念構成を指導するものは價值(文化價值)である。この價值關係付的敘述は、この指導價值を價值として了解する特定範圍の人々に對して妥當する。價值關係付的敘述の客觀性はかかる範圍の文化人に對してのみ妥當する。歴史的概念の指導原理は、事實的評價の價值である。ここでは文化價值の事實上の一般的承認で充分であり、その妥當は問題外である。これによつて經驗的客觀性が達せられる。文化科學的認識・文化科學的概念構成の本質たるかかる「理論的價值關係付」は、「實踐的評價」と嚴密に區別されねばならぬ。この兩者は論理的本質において原理的に異なるものである。理論的價值關係付は事實確定の領域に留まるが、實踐的評價はそれを超へるものであり、評價はつねに肯定的或は否定的、稱讚或は非難である。價值への純理論的な關係付と意欲及び實踐的價值とは對立し、認識する理論的人間と意欲する實踐的人間とは對立するものである。そして「價值哲學」も科學的たるかぎり、價值の妥當及びその理論的理解を取扱ふのみであり、新價值の「發見」及び「幸福な生活への指示」を取扱ふものではない。人間に對して彼は何を意欲すべきか、或は何を爲すべきかを教へ得る科學は存在しない。倫理學も、倫理的命令の意味を自律の倫理的價值概念に基いて理論的に了解するのみである。またすべての價值が倫理的價值であるかのごとくなすのは、一面的な道德主義である。リッケルトは以上のごとくの

べてゐる。これによつて明かなごとく、ウェーバーにおける沒價值性要求・存在と當爲・客觀的認識と價值判斷の峻別等は、リッケルトの文化科學論における理論的價值關係付と實踐的價值判斷との區別等に連つてゐる。さらにそれはヴァンデルバントにおける「自然法則」と「規範」との區別及び「發生的方法」と「批判的方法」との區別にも連つてゐる。ヴァンデルバントによれば、心理學的必然性と規範的命令とは對立してゐる。自然法則は判斷的理性に屬し、規範は價值判斷的理性に屬してゐる。自然法則が價值判斷の原理でないと同様に、規範は説明の原理ではない。すべての事實の中、及びかくて心理學的又は歴史的に證明され得る經驗的妥當の中には、規範的妥當に對する證明は求められ得ない。批判的方法は心理學及び歴史の事實を規範に對する妥當根據として承認し得ない。發生的事實は説明根據ではなくて批判の對象である。

以上、ヴァンデルバント・リッケルト・ウェーバーの理論史的連關の裡に、ウェーバー沒價值性論の一基礎が理解される。沒價值性論の根源的基礎は存在と當爲との峻別であるが、「存在と當爲」の問題におけるかかる見解は、ウェーバー獨自のものではなく、一般に新カント派IIカント派方法論に共通的なものである。存在と當爲、存在と價值の兩者を無條件的な絶對的な對立とする「二元論」、これがウェーバー沒價值論の根底に横はつてゐる。ここに沒價值性論理解の一基礎



が存すると共にまた没価値性論批判の一基礎が存する。一般に存在と當爲との峻別・對立は理想主義的<sup>3)</sup>に觀念論的思惟の基礎原理である。リッケルト自身も「科學としての理想主義的政策論」において、科學と政策の關係、科學としての政策論は可能であるかの問題に關説してゐる。彼によれば、理想主義的政策論の「論理的構造」の典型としてフイヒテの「封鎖的商業國家」<sup>4)</sup>が擧げられ、それは哲學・時代史・政策論の三部に分れる。「哲學」は理性國家の論であり、「時代史」は現實國家の分析であり、「政策論」は理性國家と現實國家との結合を要求しその方策を立論する。この第一部「哲學」の基礎づけに重點が横はり、理性國家の學としての哲學は可能であるか、科學は將來に對する政策的理想を基礎づけ得るかが重點となり、權利問題と事實問題とのカント的區別が問題となる。そしてリッケルトによれば、フイヒテのいふ理性は當爲的な價值であり、理性國家は價值國家である。理性、價值はすべて當爲であり、當爲なくしては政策は考へ得られない。ここでリッケルトは理想主義的政策論の「論理的構造」を明かにするのみで、ここでその前提基礎たる當爲の内容については彼自身ものべず、かかる理想主義が學として可能であるかは疑問であるとしてゐる。ともかくかくのごとく理想主義<sup>5)</sup>に觀念論的思惟においては、存在と當爲とは絶對的な對立であり、現實は存在の領域であり、當爲は現實から除外されてゐるのであ

る(二元論)。

しかしながら、現實的なものは必然的なものを基礎とし、この必然的なものは理性的なものである。社會における生成・發展・消滅の不斷の變化の中では、外見上の偶然と一時的な後退とが現れるにも拘らず、結局は前進的は必然的進歩が貫いてゐる。社會は必然的な運動法則をもつところの現實的存在である。この社會の歴史的運動の現實的必然性が社會の現實的必要性となるものであり、社會の歴史的必然性が社會の必要<sup>6)</sup>要求となるのである。かくて所謂價值的なものは社會的存在の反映であり、歴史的社會的事實が當爲・價値の具體的内容となるのである。社會はそれ自らの歴史的原理<sup>7)</sup>運動法則をもつものであり、その必然的なものは合理的なものである。歴史的なものは價値なき偶然的なものにすぎず、價值的なものは本質的永遠的なものであると考へるのは、觀念論的思惟に外ならぬ。社會の現實的發展における歴史的必然性が、まさに價值的合理性となるのである。(没価値性論の一理論的基礎たる存在と當爲との絶對的區別<sup>8)</sup>二元論に對する一批判)。

## [2] 價值闘争説<sup>9)</sup>多神論

さらにウェーバーの没価値性論の一基礎は彼の價值闘争説<sup>10)</sup>多神論である。この價值闘争説<sup>11)</sup>



多神論は、各価値の獨自的絶對化、価値の無政府主義、世界觀の無政府主義を意味してゐる。それはウェーバーの自由主義的・個人主義的・民主主義的な根本的立場の一表現であり、中世的な傳說的價值秩序に對する一反抗である。かかる價值鬭争說<sup>5)</sup>多神論は、現實的には國內における各政黨相互の鬭争と、國際間における各國民相互の鬭争とに、相ひ照應するものとして解釋せられる。また思想的には價值<sup>5)</sup>世界觀の無政府性は、古きものを盡くし新しきものを見出し得ずして、普遍的價值定立への疑惑で以つて滿たされてゐる時代の一表現であるとせられる。かような價值鬭争說、多神論<sup>5)</sup>價值・世界觀の無政府性は、當然に一價值を王座とする一義的價值體系を否定し、したがつて客觀的な究極目標の定立を拒絶する。ここでは個性的な各主觀的目標が、それぞれ獨自化せられ絶對化せられるのである(多神論)。

みぎによつて明かなごとく、ウェーバーの根本的立場は「個人主義」的立場である。その文化科學方法論についてみても、價值關係付科學の嚮導的原理たる文化價值は、リッケルトにあつては、可及的な經驗的客觀性を要求せられたが、ウェーバーにあつてはその「主觀性」を正當に許容せられ、主觀的價值觀點の下にウェーバー的な「認識の客觀性」が構成せられたのである。またウェーバーの社會學<sup>6)</sup>も「個人主義的方法」によつて貫かれてゐる。彼の了解的社會學は、個別

的個人及びその行爲を社會學の基底の分子として取扱ひ、社會的構成體を單に個別的人間の特殊行爲の聯關として把握し、かくして歴史的社會を個人的行爲から理解しようとする。かかる個人主義的「方法」は、直接には個人主義的「評價」を意味しないとしても、彼の立場の個人主義的な性格の一表示である。のみならずこの方法論的個人主義は、實質的にはすでに單なる方法的なもの(個人主義的方法)より、内容的なもの(個人主義的評價)に轉化してゐる。ウェーバーの根本的立場はまさに個人主義的である。それ自らの上に立てる個人のみが、眞に實在的なものとされる。獨自的個性の權利の擁護がウェーバーの關心である。彼は個人主義・自由主義・民主主義の理念及び「個人の解放」の理念を賞讃する。かくてここにウェーバー的思惟の基礎に横はる世界觀が明かとなる。「意欲する個人」が彼の中心問題である。それ自らの中に封鎖的な・それ自らの上に立てる・それ自らの信仰に滿ち・それ自らの主觀的理想に身を捧げるところの個人、これが問題の核心におかれ、そして各個人の獨自的な主觀的意欲が唯一決定的な審判者とせられる。かような世界觀は、デイルタイのいふ「主觀的理想主義」<sup>7)</sup>「自由的理想主義」に當るであらう。それは所與に對して至高の自己支配性をもつて立つ態度であり、行爲する個人から出發し目的定立の確固たる規準を要求する思想であり、英雄的人間の形而上學的意識である。なほかか



る個人主義的立場は、彼の政策・實踐觀にも現れてゐる。即ち政策は理想の主張として規定せられる。彼において實踐は、人格の自由意志に遡及する個人的行爲・主觀的行動として把握されてゐるのである。

以上、ウェーバーの沒價值性論の一基礎たる價值鬭爭說<sup>1)</sup>多神論<sup>2)</sup>價值・世界觀の無政府性を明かにし、且つその個人主義的な根本的立場を明かにした。客觀的な唯一的目標・理想の否定は、この立場からする當然の歸結である。そして、かかる唯一客觀的な目標定立の不可能性は、唯一絶對的理念の支配を信仰する形而上學的立場を除いては、一般に觀念論的立場に基く思惟に共通的なものである。リッケルトの「價值體系論」或はディルタイの「世界觀論」も、この點においては同じである。即ちリッケルトは前記のごとく、理想主義的<sup>3)</sup>觀念論的政策論の論理的構造における根本的前提として價值・當爲をみたが、しかし普遍妥當的な唯一價值の客觀的科學的證明への彼の試みは、空しい努力に終つてゐる。彼における價值體系<sup>4)</sup>價值階梯は「純形式的」なものである。それは世界觀の問題に對する解決を與へるものではなく、内容的に決定された文化財のいづれが最高のものでして妥當すべきであるかを決定し得るものではない。またディルタイにおける世界觀類型の構成も、唯一最高の價值・世界觀を定立するものではない。即ちディル

タイによれば、歴史的事實によれば、各世界觀・人生觀はつねに相排撃し、鬭爭し合つてその決定をみない。かかる歴史的意識と世界觀の普遍妥當性要求との矛盾は、二律背反として規定される。そして彼によれば、世界觀の究極的根源は「生」であり、この人間存在様式の可變性（多様性）に、思惟様式の多様性が對應するのである。「生」は多面的であり、諸々の世界觀は生の種々な側面の各必然的表現である。かくて彼は、世界觀の多様性を生との聯關に持ち來たすことによつて、世界觀の主要形態<sup>5)</sup>類型を構成する。この世界觀の各類型は、それ自らの現實認識・生活評價・及び目的定立をもつてゐる。しかしながら、世界觀のかような類型は並立的な類型であり、その世界觀相互間の價值秩序（體系・序列）をもつものではなく、したがつて最高の客觀的目標の定立可能性を與へ得るものではない。

以上、觀念的思惟における客觀的目標定立の不可能性についてのべた。さらに、マンハイム的な知識社會學の立場も、客觀的政策目標の問題に解決を與へるものではない。マンハイムによれば、政策的思惟は存在によつて拘束せられ、立場によつて拘束せられてゐる。それ故に各政策的知識の黨派性が認められると共に、同時にそれぞれの特殊性が認められる。そしてこの特殊性は、その中に全體が生成しそして各黨派的見解はこの全體への相互補充的な部分洞見であること



を意味してゐる。すべての政策的見解は部分見解であるが、その特殊性は生成的全體の成素中に構成されるが故に、それらの總観が一の課題である。そして特殊な諸洞見のかかる總観は、靜的綜合でなく動的綜合であり、絶對的綜合でなく相對的綜合であり、合計的綜合でなく眞の綜合であると思はれる。そして現實的には、かかる綜合なる使命の社會的政策的擔當者をマンハイムは知識階層に求める。知識階層は相對的に無階級的な層であり、社會的空間を浸透してゐるあらゆる感情をそれ自らの中に結合してゐるとせられる。しかしながら所謂知識階層は、それ自ら統一的な社會層でもなく、また動的綜合の課題を果し得るほど強力でもない。さらにここに所謂動的綜合は、その實質においては、各々の目標或は世界觀にその社會的被制約性を説得し、以つてその間の政治的妥協を計る以外の何ものでもない。

一般に社會の歴史的運動・その生成・發展・消滅の中においては、先天的豫定的な神秘的託宣も、永遠的理性も、絶對的目標も存在しない。社會における具體的目標は、所謂超時間的な「普遍妥當性」への要求と絶縁することによつて「歴史的客觀性」を獲得し得る。一般に社會における實踐的目標は、社會の必然的運動の現實的地盤から生れる。そしてこの諸目標は、形式的平等性において並列するものではなく、その間に歴史的客觀的な價值的序列をもつものである。社會

の必然的運動において、歴史的必然性は價值合理性として表現せられ把握せられる(前記)。社會の歴史的な必然的運動との聯關において生じた一定目標は、それ自體は特殊に「主觀的」(「すべてでない」)でありながらも、社會の必然的運動を媒介として、特定發展段階における「歴史的客觀性」を獲得し、しからざる目標に對して歴史的社會的「優位」をもつものである。主觀性と客觀性とのかかる發展的統一において、特定目標は歴史的客觀性(・歴史的的代表性)を獲得し、歴史的特定段階における客觀的(「科學的」)目標となるものであり、かかる目標は人類社會を發展さすべき歴史的使命を擔つてゐるものである(沒價值性論の一基礎たる價值闘争論Ⅱ多神論Ⅱ價值・世界觀の無政府性に對する一批判)。

### [3] 科學觀・實踐觀

ウェーバー沒價值性論の一基礎としてさらに彼の「科學」觀が示される。彼によれば、科學の進歩は數百年來の知的化過程の一部分しかも重要な一部分である。人間の全生活内における科學の職分は如何なるものであるかに關しては、過去と現在との間には大なる差異が横はつてゐる。眞の存在への道、眞の藝術への道、眞の神への道、眞の幸福への道、――科學の職分に關するかような過去の幻影は、現在ではすべて消滅した。現在においては科學は、事實的聯關の自省と認識



とのための専門的職分であり、そして救世財及び啓示を與へる豫言者の施物でもなければ、世界の意味についての賢者・哲人の思慮の一成分でもない。このことは現在の科學の歴史的境位の脱却し得ない所與である。みぎのごとく、ウェーバーによつて没價值性を要求せられた科學は没價值科學は、一の歴史的範疇としての近代の合理的科學である。専門的に營まれる科學、専門的學科經營としての科學、専門學科的に合理化せられた科學、これが近代及び現代における科學の性格的「運命」として觀念せられる。そして今日においては科學者は「専門」家であり、現實に終極的且つ最善的な給付は専門的給付であり、かくて専門人の専門的仕事は價值ある行爲一般の前提とせられる。また彼にあつては、究極的價值尺度の非客觀的妥當性及び一般的な拘束的規範の缺如は、科學の抽象的な一般的本質に屬するものではなくて、認識の木の実を食へた文化時期の運命の特性から生ずる。科學の専門的分化は、世界に意味を與へることを不可能ならしめた。かくて没價值性は近代における技術的な科學經營の「歴史的運命」と觀せられる。

かような合理的科學は、ウェーバーによれば、近代の人間生活特に西洋における人間生活を支配した「合理化」過程の一結果である(後述カール・レヴィトのウェーバー註釋参照)。文化生活一般の普遍的な合理化は、現代の根本的性格であり、その運命と觀せられる。そしてかかる合理

化の一般的結果は、世界の魔術性打破であり、そのイリュージョン破壊である。この偶像破壊は、同時に時代の運命、日常生活及び日常の要求に對する肯定であり、超越的なもの及び客觀的なものに對する決定的な否定である。かかる「合理化」觀が、ウェーバーの全理論を貫く一原理である。彼において近代生活一般を特徴づける原理とせられる合理化は、近代の科學の特性をも規定する。科學も「専門學科」として一般的運命の擔ひ手である。科學の方法は經驗的方法であり、科學は此岸性への性格をもち、此岸的に日常に向けられた生活把握であるとせられる。

以上、ウェーバーの没價值性論の一基礎としての彼の科學觀及びその根源を明かにした。これによつて明かなごとく、ウェーバーの科學觀はそれ自體一の態度決定であり、歴史的社會的現實に對する人間の特定立場の一表現である。近代現代における科學の時代的運命或は近代的科學の不可避的所與として把握されてあるものは、ウェーバー的主觀における運命であり所與である。かような運命或は歴史的所與を主觀的に認容し、かかる科學概念を現代における唯一可能なものとして指示することは、單に科學的境位の認識或はその科學的決定たるものではない。それはすでに生に對するウェーバーの根本的態度の科學内への導入であり、運命的所與への主觀的信仰である。それは彼における形而上學的なもの、彼の形而上學的思惟の一現れであり、超科學



的な一の確信であるといひ得る。以上のごとく、没價值的科學なる科學概念は、唯一絶對的な科學概念ではなく、特定の歴史的段階における主観的な態度決定の一表現である。かような科學は、その理論的形式からみれば、「説明的傾向」のものといひ得べく、しかも根本的には「科學のための科學」なる科學理念を含み、價值判斷と科學との分離を要求する一定の世界觀の上に立つといひ得られる。なほ、ウェーバーの「職としての科學」論は、科學は何であるかをのべるよりも、むしろ科學は今日何でないかを主張する。没價值性要求における彼の根本的な關心は、價值判斷の排除によつて科學を清淨ならしめるよりも、むしろ「個人の價值判斷」を科學から解放するにある。即ち、かの世界及び人間の心を動かす意義をもち理念的意義の大なる「當爲」の問題が經驗的専門學科の論議の對象とされることは、彼の忍び得ないところである。重點は科學的威嚴の救済よりも、むしろ究極的な人間の威嚴の救済に存する。評價・價值判斷なる最も神聖なものは、科學に冒瀆されてはならぬ。科學的認識は最高のもではなく、價值の世界は經驗的に把握され得る世界の頭上高く君臨する。この點においてウェーバーの科學觀にも、個人・個性の尊嚴といふ個人主義的立場が現れてゐる(没價值性論の一基礎たる科學觀に對する一批判)。

以上、ウェーバーの没價值性論の一基礎たる彼の科學觀を分析・批判したが、これとの關聯に

おいて彼の政策觀・實踐觀について一言する。ウェーバーの根本的立場は個人主義的立場たること前記のごとく、かくて政策・實踐も個人主義的に把握されてゐる。即ち「政策」は理想の主張として規定される。彼においては「實踐」は、人格の自由意志に遡及する個人的行爲・主観的行動として把握される。かかる實踐把握(個人的實踐)の下においては、實踐的個人は自由に如何なる主観的理想をも追求し得ることとなる。生を選ぶか死を選ぶかも各人の自由意志にまかされるであらう。かかる個人的行爲においては、歴史的に客観的な目標は存在し得ない。しかしながら、「理論と實踐の問題」における實踐、社會科學の問題における實踐は、みぎのような單なる個人的行爲ではない。それは單に個人主義的に把握された實踐Ⅱ個人的實踐ではなく、歴史的社會的實踐である。一切の歴史の第一前提は、歴史を作るためには人間が生きなければならぬといふことである。歴史を作り社會が發展するための實踐は、單なる個人的實踐ではなく歴史の實踐であり、一切の歴史の根本條件である。ここでは實踐は社會の歴史的運動の實現として把握される。かくて原理的に歴史的社會的な意義と力をもつ實踐は、歴史的社會的實踐として把握される。單なる個人的行爲と異り、かかる歴史的社會的實踐の目標は歴史的客観性をもつ目標であり、この目標は社會の必然的發展の中から必然的に生れる歴史的社會的目標である。そして科



學・理論はかかる實踐と密接に結合聯關してゐる（かくて沒價值的科學ではなく實踐的科學・實踐的理論）。（沒價值性論の一基礎たる政策・實踐觀に對する一批判）。

以上。沒價值性論の主要基礎として存在と當爲との峻別、價值闘争觀・多神論、科學觀（沒價值的科學）、實踐觀（個人的行爲）を取り出し、その各々を内在的に展開し、且つ若干の内在的・超越的批判をのべた。これらの基礎的諸問題について、積極的意見をのべることはここでは止める。しかし以上の沒價值性論分析・批判によつても、沒價值性論に對する批判的立場が自ら明らかとなるであらう。

- 1) H. Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, bes. S. 86ff. Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, bes. S. 697ff.
- 2) W. Windelband, Normen und Naturgesetz; Kritische oder genetische Methode (Präludien bes. S. 60ff., S. 118ff.)
- 3) H. Rickert, Über Idealistische Politik als Wissenschaft (Die Akademie, 1925—Heft 4).
- 4) I. G. Fichte, Das geschlossene Handelsstat.
- 5) C. Seidng, Politik und Wissenschaft bei Max Weber. S. 26ff.
- 6) M. Weber, Methodologische Grundlagen der Soziologie. (Wissenschaftslehre).

- 7) W. Dilthey, Weltanschauungslehre (Gesammelte Schriften, 8. Band), bes. S. 3ff., S. 107ff.
- 8) H. Rickert, System der Philosophie, I. Teil, bes. S. 406ff.
- 9) K. Mannheim, Ideologie und Utopie, bes. S. 67ff.

### Ⅲ 沒價值性論註釋

#### [1] ウェーバー註釋

以上において我々はウェーバーの沒價值性論の内容を要括し、且つその沒價值性論を批判的に分析した。これらの理解に資するため若干のウェーバー註釋的資料をつぎに示しておく。

一 ヴァルプラントのウェーバー註釋。ウェーバーとヴァンデルバント・リップケルト哲學との間には、世界觀における親近性が存在してゐる。ウェーバーの哲學的友人たるリップケルトは、個人的決定を生ずる最高の目標及び價值の不可證明性といふ歸結に到達した。ウェーバー及びリップケルトにおいては、世界に對する考察様式は人間の「意志側面」のそれである。それはデルタイのいふ「主觀的理想主義」或は「自由的理想主義」なる世界觀型である。義務・當爲・良心のこの世界觀においては、世界は人間の行爲の闘争場である。唯一の究極的目標・唯一の價值判斷



尺度として、意欲されたもの、理想への忠實な固持、確信への忠實、意志強固、克己、自律が残る。ウェーバーにあつては、最高の意志決定、目標定立、究極的評價は個人的である。政策は理想の主張として把握される。これは理想主義者の政策概念であり、政策は科學たり得ない。そして科學からの價值及び政策の排除に對して決定的なことは、最も神聖なるもの（價值・政策）を冒瀆から救ふことである。經驗科學の提供する認識は唯一且つ最高のものではなく、價值の世界は經驗的に把握され得る世界の高尚く無限に聳へてゐる。ウェーバーの世界觀は「意欲」する人間の世界觀であり、「悟性」から出發する世界觀及び「感情」から出發する世界觀に對應する。トレルチはウェーバーにおける絶對的教義として國民・人間威嚴・正義の範疇的命令への信仰をあげてゐる。これにさらに彼の市民性及び個人主義が附加され得るであらう。ウェーバーの關心事は意欲するもの、神の前或は良心の前に自らを決定するものとしての人間である。彼の世界觀は當爲・良心・義務の世界觀であり、文化價值・意志を固持し選擇を決定し目標を定立しながら意欲する人間の世界觀である。ウェーバーは主觀の解放を行ひ、行爲者に道を開き、道德的自律を救済し、決定の自由・選擇の必然性・個人的決定の課題を明かにしたものである。

1) Wirbrandt, Der Volkswirt als Berater der Volkswirtschaft, Bes. S. 195ff.; Des Zentralproblem der National-

Ökonomie als praktische Wissenschaft (Wirtschaft und Gesellschaft, Festschrift für Franz Oppenheimer S. 9—21).

二 カール・レヴィットのウェーバー註釋<sup>2)</sup>。ウェーバーは市民的社會學の代表者であり、政治的及び科學的「自由主義」の代表者である。彼にあつては究極的な人間的威嚴の救済が問題であり、人間の解放が根本問題であつた。その科學的仕事において究極的に決定的なものは、科學それ自體に全く超越的な動機から生じた。ウェーバーは、經濟が人間の運命となつたといふ經驗に基いて、市民的社會の現實的人間の批判的分析を與へた。彼は資本主義を普遍的な「合理化」といふそれ自體において中立的な・しかし評價上二義的な觀點の下に分析した。資本主義を原理的に特徴づけるこの合理化は、近代の科學の特質をも形づくる。即ち科學も専門學科經營、専門學科的に合理化された科學として、この一般的運命（合理化）の擔ひ手である。かかる科學が意味をもつか、また如何なる程度の意味をもつかは、それ自身からは（科學的に）基礎づけられない。ウェーバーにおいては、究極的價值尺度の客觀的不妥當性及び拘束的規範の缺如は、科學の一般的本質に屬するものではなくて、認識の木の實を食べた一文化時期の特性から生ずる。彼は、客觀的に妥當する價值判斷を下す不可能性が證明されると、「人間の自由」についての彼の理念にしたがつて一安息した。ウェーバーはその「個人主義的」及び「合理的」定義的方法的意義を主張



したが、フライヤーはウェーバーの方法論的個人主義は内容的なものに轉化するといふ。彼の社會學的個人主義は、社會的秩序への近代的人間の非束縛性即ちゲゼルシャフト的構造を前提してゐる。所謂社會的構成體についてのウェーバー的の個人主義的定義の究極的前提は、個人・それ自らに立つ個別的人間ののみが現實的且つ存在正當的であるといふことである。ウェーバーにおいて現實在の解釋に對する導きの糸は「合理化」の過程である。この合理化は西洋の生活一般の根本的性格且つ人間の運命を意味する。そして彼によれば、資本主義は「合理的生活」の道において發展したが故に、それは人間の生活の運命的な力になり得たのである。「合理性」は生活態度及び生活指導の全體として、西洋のエトスとして概念される。この方向決定的なエトスは、市民的資本主義の精神にも、市民的プロテスタンティズムの精神にも現れてゐる。經濟も宗教も、生活の普遍的な合理性の基礎の上で合理的に構成される。生活一般の合理性が、經濟的意味における資本主義をも支配的生活力に成長せしめたのである。そしてこの「合理性」はウェーバー自身にとつては「自由」の場所である。合理性と自由とは聯關する。合理性は目的論的合理的として、適合理的手段の自由な考量において目的を追求する自由であるといふことによつて、合理性は行爲の自由と聯關する。自由な人間として行爲することは合目的的に行爲することを意味する（目的合理的）。

理的）。

2) Karl Löwith, Max Weber und Karl Marx (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, 67. Band, Heft 1, 2)

三 マリアンネ・ウェーバーのウェーバー註釋。ウェーバーはフライブルク大學就任講演「國家と國民經濟政策」において、哲學的問題に對して初めて態度を示し、そこで國民經濟學の素材領域から「獨自的理想」を引き出すことの不可能性を明かにした。彼は認識する人間と意欲する人間とを區別し、この區別に必要な精神的道具を援與したのは當時の論理學及び認識論特にリッケルトの科學論であり、リッケルトの科學論においても彼にとつては特に「實踐的評價」と「理論的價值關係付」との區別が重要である。知識と信仰、認識と評價、證明され得るものと證明され得ないものとの境界線の認識が重要である。しかしながら理論的價值關係と實踐的價值判斷、認識と意欲のこの二つの精神的機能の分離は一般に可能であるかについては、つねに議論があり、また認識する人間は行爲する人間から離れ難いといふ人格の統一が反抗してくる。しかしウェーバーにとつてはその分離は研究者の理想であり、可及的にそれに接近すべきものとせられる。彼は經驗科學の課題を規範科學に對して限界づけたが、さらに哲學の課題について彼は科學的哲學と科學外的哲學とを區別する。論理學、認識論、價值論（諸評價の意味を確める）は科學



的限界内にあるが、存在の超經驗的意味を解明し統一的な對象的世界形象を提供せんとする形而上學的思辯は科學的限界外に横はる。また彼によれば「文化價值」と「倫理的命令」との同一視は不可能であるが、ここにウェーバーの倫理的の世界觀が明かとなる。即ち可能的な諸理想が二つの對極に分裂する。一方では如何なる倫理とも衝突する文化理想があり得、他方ではすべての文化價值を否認する倫理も內的矛盾なしに可能である。さらに、ウェーバーの了解的社會學の方法は「合理主義」的及び「個人主義」的として特徴づけられ得る。しかし概念構成の合理主義的性格の見解は合理的動機の支配への信仰或は合理主義の積極的評價を意味せず、また個人主義的方法は個人主義的評價を意味しない。

3) Marianne Weber, Max Weber, ein Lebensbild, S. 320 ff. S. 690 ff.

四 リッケルトのウェーバー註釋<sup>4)</sup>。ウェーバーは本來的に學者及び政治家の兩者であつた。ウェーバーの科學觀(沒價值的科學觀)は、彼が科學及び政治に對しても二重關係から最も明かに理解される。ウェーバーは本來的意味の哲學に關心せず、一般的世界觀の問題を科學的に討究することに關心しなかつた。しかし彼は論理學の問題に導かれ、それは歴史的科學の論理的構造を理解するためであつた。歴史學者は文化生活を研究對象にもつが、科學人としてはそのいづれかに

448148

味方するものではない。では如何なる範圍において有意味的文化の「純粹」科學が存在し得るか、また實踐的評價をなさぬ理論は政治的人間に何を意味し得るか、ウェーバーはこの問題を考究した。また彼によつては、經濟的生活に對する精神的諸力特に宗教の影響を理解することが重要となり、このことは彼を純歴史的考察即ち具體的「個別生起」の個別化的敘述をこえて、社會的文化生活における「一般的聯關」を發見する研究に導いた。かくて一回的事例をその特性において把握する「歴史學」者から一般化する「社會學」者が生れたのである。この歴史學者から社會學者への移行において、ウェーバーの政治的思惟が一役割を演じてゐる。個別化的歴史學は行爲する人間には充分でない。政治家が實踐のために理論を採用するには、過去の特殊的事例よりも諸時代に安當する一般的規則が必要である。一般化的社會學から政治的目的の實現のための手段が引き出される。かかる實用主義的觀點はウェーバーによつて決定的ではなかつたが、しかし社會學者への移行によつて彼においては理論的考察と政治的行爲とは以前よりも密接に聯關せしめられた。社會學が政治家の道具になり得たのである。しかしウェーバーによつては科學と政治の間にはなほつねに深い溝が横はつてゐる。

4) H. Rickert, Max Weber und seine Stellung zur Wissenschaft (Logos, 15. Band).



五 バウル・ホニヒスハイムのウェーバー註釋<sup>5)</sup>。ウェーバーは、評價と價值關係との區別についてのリッケルトの説に結びつきながら、それを社會科學に獨立的に適用し、その「評價」の下に専ら社會的事實の實踐的評價を理解した。ウェーバーの「職としての科學」は、科學は何であつたかを示すと共に、科學は何でなかつたかを示す。彼にとつて科學は最高のもを意味し得なかつた。蓋し科學は、科學的手段で以つては價值或は不價值、意味或は不意味についての得ない。彼にとつて哲學はまづ論理學であり、さらには認識論であつたごとく、個別科學も自己目的ではなく、科學的認識に依存しないより高い目的のための手段であつた。即ち科學は、神或は惡魔が人間に與へた科學外の目標定立から生ずる目的の實現のための技術的器具を征服する一可能性である。ここに彼の特質が横はつてゐる。彼に於ては科學は、自然主義的・資本主義的生活様式の並行現象であり、神に遠ざかれる現在の時代の表現形式である（この點においてジムメルと同じ）。彼は科學で悩んだが、それを受忍し、科學の成果に警告を與へたのである。彼は神に縁遠き時代に苦んだが、その不可知論には苦しまなかつた。認識の新たな限界が引かれ、客觀的に妥當する價值判斷を下す不可能性が證明されると、彼は一安息した。規範の承認を妨げることが彼の一本質的課題のごとくみえ、そして神或は惡魔が示した目標の實現に努力することを望んだので

ある。

5) Paul Honigshain, Max Weber als Soziologe (Kluner Vierteljahrshefte für Soziologie I. Jahrg., Heft 1)

六 エリク・ヴァルフのウェーバー註釋<sup>6)</sup>。理論史的には、ウェーバーの知的力及び歴史の意味はその科學的研究の出發點をリッケルトの歴史哲學の中に見出し、彼の社會的事實の認識及び倫理的パトスは彼をジムメルの理想主義的社會學と結びつけ、彼の教育學的衝動は彼を方法問題の究明に驅つたのである。政治家的型としては、彼は國民國家的な自由主義者及び良き歐洲人である。ウェーバーはその倫理的及び哲學的態度によつて今日における科學的思惟の危機的狀態を表現してゐる。この危機的狀態は、價值定立への科學の職分に對する疑念によつて特徴づけられてゐる。この一見相對主義的とみえる態度で以つてウェーバーは、社會學者としては實證主義の側に立ち、哲學者としては理想主義の側に立ち、そのかぎりにおいて彼は今世紀から始まつた精神科學の危機の型である。ウェーバーは、知識の分野と信仰の分野とを區別するといふ二元論的態度を把持した。彼は科學的價值認識の相對性の命題を基礎づけんとし、それには社會學が役立つた。即ち精神的態度は歴史的社會的狀態によつて制約されてゐるといふ社會學的認識を、ウェーバーはジムメル・トレルチ・デュルタイと共にした。また彼は實質的世界倫理を斷念し、批



判的・倫理的な態度を表現した。そのかぎりでは倫理學と形而上學、知識と信仰、歴史的理性と批判的理性との科學的區別の先驅者であり、批判的倫理學にとつて必要とされる。しかしながらウーバーにおける批判的態度にも拘らず、なほ形而上學的なものが作用してゐる。生が理論に對立せられ、信仰の世界が知の世界から分離せられ、没價值的な歴史解明は諸黨派及び神々の鬭争の現實生活に對して不拘束的として特徴づけられ、そして全科學は器具になり下るのであるが、しかもなほ「形而上學的」なものが留まつてゐる。社會的現實在の歴史的所與性及び研究者に對する實存的拘束的な歴史的所與の認容は、單に文化共同社會生活の現實在に關する限定的知識を意味するに留まらず、生に對する彼の個人的根本態度の知識内への引入れを意味してゐる。これは認識の上に基くものではなく信仰の中に基いてゐる。彼が科學の没價值的態度を今日における唯一可能的なものとして指示した場合、それは單なる歴史的社會學的な認定以上のものである。科學の没價值的性の要求で以つて、信仰の世界と知識の世界、實踐的なもの世界と體系的なもの世界とが區別されてゐるのであるが、しかもウーバーは「運命」概念の綜合においてそれを再び合一してゐる。新しき神或は古き神への形而上學的熱望に對する批判的斷念は自由に選ばれたものではなく、體系的神學的に基礎づけられた基督教的文化の支配に對する運命的豫定的反抗である。

であるといふことが、ウーバーの研究に現れてゐる。また思惟の没價值的性は、技術的科學經營なる時代運命への深き沈潜を教示するものである。没價值的科學なるこの社會學的概念は、過去の批判的絶交を意味し、認識を地上的生起の限界内に留め、理想を定立することを叱責したものである。

6) Erik Wolf, Max Webers ethischer Kritizismus und Problem der Metaphysik (Logos, 19, Band, Heft 3)

## [2] 補論

上述の没價値性論及び批判の參考として、没價値性脱却の努力としてのヴァルプラントの所謂分析的理想論、ゴットルの所謂存在論的價値判斷、及びウーバーと共に没價値性を主張したるゾムバルトの規範的政策論批判を要括すればつぎのごとくである。

一 ヴァルプラントの分析的理想。シラクは究極的理想の相對性を認め、普遍妥當な客觀的目標の存在しないことを承認する。しかし彼は假設的な超越的目標を定立する權限を科學に與へ、そしてかかる目標が一般的に意欲せられ追求せられるといふ前提に基いて、科學はその目的實現のための手段を指示し得るといふ。しかしながら、假設される超越的目標が唯一の前提目標として證明せられぬかぎり、政策目標の客觀的統一は得られない。これに對してヴァルプラントは、



唯一前提目標を求めようとして彼のいはゆる分析的理想に到着する<sup>2)</sup>。彼は經濟自體の中に目標を探ね、「手段の一般論」を構成しようとする。經濟は手段を必要とする全目的を問題とし、「手段缺乏の防止」の努力は經濟に固有的であり、そしてかような缺乏防止の方法は、それぞれの意欲せられた具體的目的の特殊性に係りはない。手段缺乏の防止手段の可及的確保は、抽象的に包括的な目標定立である。そしてかような一義的目標は、手段を必要とするすべての意欲の分析から生ずるもの、即ちそれらの意欲とともに（それらの意欲の中に含まれて）與へられてゐるものである。それ故にこれを分析的理想といふのである。それは同時多數者に對する經濟助言の基準をなすものである。そしてかゝる目標の下において、經濟的に合理的なものに關する「純經濟的價值判斷」が可能となるといふ。しかしながら、ヴェルプラントの所論は沒價值性の問題を正面から解決することを廻避し、むしろただ手段の一般論としての技術論に轉落するものといひ得る。

1) H. Schack, Agrarpolitik als Wissenschaft (Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik, 1923);

2) R. Willbrandt, a. O.; Das Problem der Volkswirtschaftspolitik; Oekonomie.

二 ゴットルの存在論的價值判斷<sup>3)</sup>。ゴットルは價值判斷として、論理的價值判斷、目的論的價值判斷、倫理的價值判斷、イデオロギー的價值判斷及び存在的價值判斷をあげ、そして政策的考

量の基礎を存在論的價值判斷に求める。彼によれば經濟は欲求と調達との持續的調和の精神における人間共同生活の構成である。「生」としての經濟は、それみづからで存在し、經濟自身の「存在」の中にその深き「意味」が含まれており、かくて經濟の意味と存在とが一致する。一部の人のごとく、經濟は手段の領域として超越的聯關の中におりこまれ、人生の目的に奉仕せしめられ超感覺的な意味に従屬せしめられ、それみづからに内在的な意味をもたないと考へるのは、經濟を「用役」としてのみ考へ「生」として把握し得ない素朴的思惟にはかならぬ。經濟に關する價值判斷は、經濟の「意味」を基準とすべく、經濟の意味はすでに經濟の「存在」でもつてみたらされてゐるが故に、この判斷は經濟における存在正當的なものに關する。「欲求と調達との持續的調和の構成的保證」といふ經濟の理念に正しく適合するもの、經濟の固有の意味上正しいもの、經濟の本質に調和するもの、即ち「經濟への構成」の地盤から存在正當的なものに關する價值判斷を、ゴットルは存在論的價值判斷とよんでゐる。國民經濟においても、生としての經濟の意味が充實さるべく、國民經濟の「生の度合」の向上は經濟政策の原理である。一過程の國民經濟性とは、國民經濟に關して存在正當的なこと、即ち國民經濟の形成において經濟が生としてみづからを充實し經濟の理念を實現することと調和することを意味してゐる。一般に現代における一派



の經濟學的自省（例へばバック<sup>4)</sup>）によれば、經濟は獨自の統一的存在様式であり、獨自的存在として最高の存在範疇である。經濟は目的論的に規定されるべきでなく、特定の目標から理解されるべきでない。經濟は人間の定在から始原的に發生し、存在必然的である。そして經濟政策學はその考察觀點を、主觀的な價值觀からとり來たるべきでなく、人間存在の生活狀況から展開すべきであるとせられる。しかしながら、ゴットルの所謂存在正當性は、形式的に假に一義的であらうとも、抽象的な普遍妥當性は現實的には無力であり、また具體的には一義的ではない。國民經濟における存在正當的なものは、現實的には特定の條件の下における特殊主觀的なものを通して達成せられる。また共同社會の精神を高揚するのあまり、企業者階級の精神的變革により直ちに利潤なき資本主義が實現すると考へ、いはゆるフォード主義的な白き社會主義の思想に拘着するならば、そこでは客觀的な經濟構成の問題が、個人的な精神的素質の問題として把握され終ることとなる。

3) Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, bes. 835ff.;

4) J. Back, Die Entwicklung der reinen Oekonomie zur nationalökonomischen Wissenschaft, bes. 2. Teil.

### 三 ヴン・バルトの規範的政策論批判<sup>5)</sup>（一）規範的政策論（指導的經濟學）の認識目標。規範的

政策論は、「在るもの」——存在——を教示するのではなく、「在るべきもの」——當爲——を教示しようとする。換言すれば絶對的命令、當爲、規範、實踐の規準の認識がその課題であつて、この道徳的世界を支配し、従つてまた、人間の經濟活動に規範を與へるところの不變的原理を探求しようとする。かゝる認識の内容は、「正しい經濟」即ち、世界の意味、人類の使命、社會の生活條件に適合した「十全的經濟」である。そしてこの「正しい經濟」なる根本理念に照して各場合の經濟が批判せられるのである。かくて、規範的政策論は、一、絶對的價值及びこれに相應する經濟狀態を發見し、二、現實在をこの理想に照して正し直すといふ二つの課題をもつ。（一）規範的政策論の基礎づけ。規範的政策論者によれば「存在」と「當爲」とは、共に認識の對象であり、規範的政策論の認識目標は「當爲」の認識にあるとされる。ではかかる當爲はいかにして認識せられるか。學史的に見るならばスコラ學派、調和論者、合理論者等が存するが、こゝでは論理的にまづ規範的政策論者の主張を四項に分つてのべ、その後これ等に對する批判をなそう。（A）論理的證明。經濟は「人間行爲」の一領域である。そしてすべての人間行爲は規範に服し、價值判斷の上基礎づけられてゐる。故に經濟學はこの規範及び價值判斷をその考察範圍にとり入れなければならない。シュモラーは曾つて「一本の釘と雖も、倫理學なくしては壁に打ちこまるゝことな



し」といつた。經濟學は正に倫理科學である。蓋し經濟の所謂「自然法則」は、倫理學の命令及び規範に服従してゐるからである。經濟は倫理によつて制約せられ、倫理の基礎の上に支へられてゐる。グスタフ・コーンは「倫理學は行爲理性の叙述に外ならぬ。それ故に人間行爲のいかに僅少な部分も倫理學から脱し得ない。經濟行爲も理性的行爲の領域に屬し倫理學に入る。それは必然的に倫理學の一部に外ならない」とのべてゐる。ヘルマン・レヴィーも「經濟的現實在、經濟的生は、因果的に把握され得る事實と、この諸事實を種々様々の相互關係におくところの評價との綜合である。それ故に價値判斷を經濟學から追放しようとする試みは誤つてゐる。蓋しかくは經濟學は「現實在」そのものに近づき得ないからである。目標定立も主觀的要求も經濟的生に經濟的現實在に屬してゐるのである。」とのべてゐる。シュタムラーも曾つて「社會の構造は論理必然的に目的論的考察方法を要求する」といつてゐる。(B)認識論的證明。當爲が悟性の範疇で以て認識せられる可能性を説明せんがために、認識論的説明は就中カントに遡る。カントは實踐理性の領域に於いても、理論理性の領域に於いてと同様に直證的アプリオリに至り得ると信ずる。フリーダー・ヴンダーリッヒはカントに據つて「當爲は經濟學の研究領域に入る。經濟學の規範學的構成は必然的である。蓋しこれ以外には經濟に關する知識を一の體系に綜合することは

不可能であるから」とのべてゐる。(C)存在論的證明。存在論的證明は存在と當爲とを同一視する。兩者は同一平面上に横はり、同一存在の二つの形式にすぎない。したがつて同一の認識手段認識方法で以つて把握され得るのである。例へばスコラ學派はかような見解をもつ。それによれば存在領域において、本質的な「斯く在る」と偶然的な「定在」とが區別せられる。本質的存在は完成せられた存在であり、「完全」である。そしてこの本質的存在は、對象の「價値」を包含する。この完全的存在は當爲的存在であり、當爲的存在は善であり眞である。善と眞とは同一事態の二つの相にすぎない。兩者は共に存在である。かくのごとく眞と善とは共に存在であり認識され得る。それ故にそれは學問の對象である。ヨハネス・ヘスレ、オトマル・シュパン等はこの部類に屬してゐる。(D)實用主義的證明。これによれば、經驗的存在にすでに當爲が示されており、かくて存在の認識の中にすでに當爲の認識がいはゞ一緒に把握されてゐる。したがつて生活の現實在の状態から、當爲の内容を導き出すことができる。そして經濟生活の「傾向」から當爲に對する基準を誘き出そうとし、或は「傳習」をば當爲の認識され得る本源であるとする。ルド・ハルトマン等のごときはかような考へをもつてゐる。(三)批判。以上のごとき規範的政策論の證明に對してゾムバルトはつぎのごとく批判してゐる。(A)論理的證明の吟味。論理的證明は



價值判斷をなす「必然性」を主張する。單に價值判斷をなす「可能性」のみではなく、その「必然性」を主張する。しかしながら「經濟生活が目的に従つて整序せられており、實際の經濟者が常に價值判斷を下しており、また學問はその研究する事實において經濟者の價值判斷を考慮の中に入れなければならない」としても、これからしては「學問自らが經濟生活に對して價值判斷を下さなければならない」といふ結論にはならない。價值判斷が實際において行はれてゐるといふことと、學問自らが價值判斷をなすといふこととは別箇の問題である。所謂論理的説明はこの二つを混同してゐるのである。(B)經濟と窮極的價值。學問内における價值判斷の「必然性」といふ主張はみぎの如く誤つてゐる。それ故に、問題は學問内における價值判斷の「可能性」如何といふことにある。思ふにすべての行爲は目的に従つて生ずる。そして「正しい行爲」に對する判斷は「正しい目的定立」或は「正しい手段選擇」に對する判斷である。しかし「正しい手段選擇」は「技術論」の問題であつて、規範的政策論にとつては「正しい目標定立」のみが問題となる。かくて「正しい行爲」に對する判斷は目的選擇の決定を含み、そしてかような目的決定は價值判斷に基いてゐる。思ふに目的選擇の決定は、その基礎づけのため諸目的の段階的體系を前提とする。また價值判斷は諸價値の段階的體系においてのみその意味を得る。そしてこの目的體系に

おける「最高目的」價值體系における「最高價値」は、思惟必然的に「超越的」である。かくてつぎの結論が生ずる—いかなる價值判斷、いかなる目的決定も、その基礎づけの場合には必然的に「超越的なもの」「絶對的なもの」の領域に入りこむこととなる。みぎのことを經濟についていへばつぎのごとくである。何等かの經濟事象に對する價值判斷は「全經濟生活の正しい全體構成」即ち所謂「正しい經濟」なる表象を前提とする。そしてこの「正しい經濟」の決定されるのは「最高目的」に照し合はされることによつてである。しかればこの最高目的とは如何なるものであるか。それは、經濟内の目的、純經濟的な目的ではない。經濟の獨目的、最高目的、經濟そのものの絶對的價値なるものは存在しない。經濟の獨目的最高目的といはれてゐるところの「國民經濟的生産力」「永續的成果」「國民厚生」といふようなものも根本的には經濟外のより高い價値に基いてゐる。經濟的決定は窮極的にはより高い經濟外の決定によつて定められるのである。これによつてみれば、當爲的經濟の體系はすべて窮極的には「社會的理想」に遡る。即ち「世界觀的に—超越的に—基礎づけられた目的體系」に遡る。しかもかような理想、目的體系は一つではなく多數ある。蓋し最高目的、絶對的價値には種々なるものが有り得るからである。そして窮極的決定の如何によつて經濟の構成にも種々あり得ることとなる。いまや問題はつぎの點にある—經濟生



活構成の種々なる可能性の中から「正しい経済」を見出し得んがために如何なる認識方法が存するか。以下、経験的知識、直證的知識及び形而上學的認識の各々について吟味することとする。

(C) 経験的知識。價值判断を基礎づけるため、まづ経験的知識が持出される。しかしこれは不可能である。即ち或るものが経験的に「ある」といふ事實、空間的時間的に實現されてゐるといふ事實は、そのものが「あるべき」であるといふ理由には決してならない。人間が理想を提出しそれを實現しようとする場合、傾向とか傳習とかいふようなものは何の關係もない。また、もし傾向或は傳習の中に、人間の自由行爲を制限すべき「必然的なもの」があると主張するならば、このときには経験的知識の地盤は放棄せられ、つぎにのべる直證的知識の地盤に入りこんでゐるのである。また人間の本質から最高目的を経験的に導き出そうとする試みも不可能である。なぜならば、それとは正反對に、人間の本質そのものが人間に課せられた最高目標即ち人間の使命からして初めて認識せられ得るからである。以上によつて、経験的知識は「正しい経済」を定め得ないことを明かにした。そしてこれは同時に前述の實用主義的證明に對する批判となるのである。

(D) 直證的知識。こゝに直證的知識とは事態の「必然性」、事態の「必然的存在」への洞察をいふ。一般に「必然的」といふ概念は「必然的存在」の意味と「必然的當爲」の意味との二義に用ひ

られるが、こゝでは存在必然性が問題となつてゐるのである。「正しい経済」を直證的知識によつて確定するとは、結局一定の經濟が必然的であることを證明することである。前述の存在論的證明はこの直證的知識をその基礎としてゐる。即ち彼等は善・理想が、對象そのものから「必然的に」認識せられ、かくて當爲は一義的に決定され得るといふ。しかし、彼等は正にこの點において誤つてゐる。まづ第一に、個々の對象の理想すらも決して唯だ一つではなく、藝術、國家、經濟等々と幾多の可能性をもつ。第二に、もしそれが一義的に決定され得ると假定しても、それが「あるべき」であるか否かは決定され得ない。例へば泥棒の概念が決定しても、それからして泥棒が價值であるとか、泥棒があるべきであるとかいふことは出てはこない。さらにまた存在或は本質から價值を導き出すことは、せいせい對象そのもの、當爲には達し得ても、人間の當爲には到達しない。なほ本質洞察に基ける價值判断は、「完全なものとは不完全なものよりも價值が多い」といふ平凡なことをいつてゐるにすぎない。第三に、理想が相互に矛盾に陥ることもあり得る。以上によつて明かなごとく、事物の本質から價值を決定しようとする場合には、構成の種々なる可能性が生じ、従つて選擇の必然性が生ずる。しかるに直證的知識は唯だ一つの可能性を許容するのみであつた。それ故にこゝでは直證的知識は除外されており用をなさない。存在論的證明の



この弱點は、シュパンにおいて特に明かに看取される。なほ總ての個別目的を最高目的に照し正すことによつて目的の一義性が得られると主張するならば、その場合は、最高目的の引き入れて以つて、直證的知識の地盤は放棄せられてゐる。蓋し、超越的な且つ内容的に決定されたものとしての最高目的は、思惟必然的に一つのみではなく、それ故に直證的でないからである。ゴットルも「正しい經濟」を認識するために、經驗的知識のほかに直證的知識を用ひてゐる。彼のいふ「經濟の地盤からする價值判斷」即ち「存在適合的價值判斷」は、行爲、方策、事象の「國民經濟性」に關してもなされる。そして彼は國民經濟性を、「構成體内の意欲充足の最も生活向上的共働といふ方式に従つて、國民經濟内において經濟が「生」として實現せられ、その理念を實現するといふこと、調和するところのもの」として一義的に決定し得ると信じてゐる。しかしながら「最も生活向上的」なる語は、量的並に質的兩方面からみて、多くの可能性、曖昧性を含んでゐる。「正しい經濟」は彼のいふごとく一義的に決定されてはゐない。以上、「存在論的證明」を批判した。つぎに「認識論的證明」の批判にうつる。カントに據つて「正しい經濟」に對する直證を證明せんとする論者のあることは前にのべた。こゝでは認識論的證明によつて經濟學内に於ける價值判斷を基礎づけようと試みられる。カントに従へば總ての直證は先天的知識を前提とする。

それ故に、一主張の直證を證明せんとする場合、問題は「當該命題は先天的に確立してゐるか否か」にある。さて、カントが社會理論を基礎づけた箇所に「人間及び一般に理性的存在は、自己目的として存在する。他の意志に對する手段としてではなく、常に目的として觀察せられなければならない」とのべてゐる。この命題は「純形式的」に把握されるならば、換言すれば理性的存在の規定として受け容れられるならば、それは何等の疑を容れない。しかし、もし「内容的」に決定せられた主張を含むものとすれば、みぎの命題は維持され難い。即ちその内容は他の可能性を許容し得るからである。その際には、人間は何故に單に手段として仕ふべきでないかは了解し得ない。キリストは人間を神の意思の道具とみたではないか。アリストテレスは奴隸制度を先天的に基礎づけたではないか。正しい經濟或は正しい社會一般を直證的ならしめ得ないこと、即ち一義的に決定し得ないことは、正に事物本來の性質に基いてゐる。經濟のアプリオリはあるにはある。しかしそれは常にただ經濟の「形式」に關するのみであるか、或は經濟の「箇別的部分」に關するのみである。それは決して經濟組織の全體―これには常に經驗的素材が固着してゐる―には關係づけられない。(E)形而上學的認識。以上において「窮極的價值」「正しい經濟」は、經驗的知識を以てするも或は直證的知識を以てするも、共に見出し得ないことをしつた。この經驗



的知識及び直證的知識の二認識様式を「學問的認識」とよぶ。一般に、認識は多くの領域をもつ。悟性的認識の外に感情的認識及び意志的認識がある。そして存在への道は我々の魂の論理的機能によつてのみならず、美的機能、社會的機能、或は宗教的機能等によつても亦可能である。これらの多くの機能の一として「哲學的機能」があり、これに相當する認識様式をここで「形而上學」とよぼう。「形而上學」の目標は「絶對的且つ無制約的なもの」の認識、あらゆる意味内容の意味の推知、世界の意味の推知にある。こゝにおいて窮極的價值を洞察する認識様式が得られた。しかしながら形而上學の對象は「超經驗的」であり、形而上學は「超學問的」である。形而上學的認識は愛、崇敬、信仰に基く。かゝる形而上學的認識の特性はほゞ次の通りである。それは第一に「個人」に結びつけられてゐる。特定の人のみが絶對界を洞察し得るにすぎない。第二に、形而上學的認識は指示され得るのみで證明され得ない。第三にそれは相對的である。即ち一定の立場からの一面的認識で絶對界の一特定部面を認識するのみであつて、普通妥當的ではない。しかして價值については、形而上學があるのみで學問はない。従つてみぎに形而上學的認識についてのべたことは「價值判斷」にも妥當する。即ち價值判斷は、個人に結びついた相對的な認識であつて、他人に向つて悟性的に強ひられ得ない。(四)結論。みぎによつて明かなごとく、價值及び

價值判斷は、經驗的知識及び直證的知識の領域外にあり、むしろ形而上學的認識(或は宗教的認識)の範圍に屬する。そして所謂規範的政策論は形而上學であつて決して學問ではない。規範的政策論に於ける價值判斷は非學問的であり排撃せられるべきである。以上、ゾムバルトの規範的政策論批判の所説を要括した。このゾムバルトに對する批判としては、先記の沒價值性論批判がそのまゝに當てはまる。

5) W. Sombart, Die drei Nationalökonomien, S. 73ff.

註

拙稿「沒價值性論分析」(經濟學雜誌第十一卷第六號)、「實踐的經營學の問題」(大阪商大經濟研究年報第五號)、「生産性の吟味」(企業經營第六卷第三號)、「封鎖的大工業の労働者の選擇及び適應」(企業經營第六卷第五號及

第七卷第一號)、「規範的政策論における價值判斷の排撃」(企業經營第五卷第四號)、「政策研究上の若干問題」

(企業經營第四卷第四號)參照。



出文協承認  
(7330225號)



昭和十八年一月十日 初版印刷  
昭和十八年一月十五日 初版發行

三、〇〇〇部

企業及政策の理論

◎ 定價 一圓

著者 上林貞治郎

發行者 伊藤長夫

印刷者 佐藤磨

發行所 伊藤書店

東京市神田區西神田二ノ十三  
電話九段(33)二三六三番  
振替東京七八一七番  
(文協會員番號一〇三〇二〇)

配給元

日本出版配給株式會社

東京市神田區渡路町二ノ九

昭文堂印刷所印行  
(東京一三四九)



33.5.10



伊藤書店新・近刊書

### 日本産業機構研究

日本軍事工業發達史……小山弘健  
日本工業電化發達史……上林貞治郎  
日本貿易構成及政策……北原道實  
附・日本産業發達史年表

(價 3.00 千・圓)

### 世界産業發達史研究

フロレンス毛織物工……藤田敬三  
業に於ける商業資本……守屋典郎  
米國棉作農業と傳統……上林貞治郎  
獨逸化學工業集中史……宮上一男  
英國工業會計發達史……岡本博之  
佛蘭西社會政策成立……岡本博之  
附・資料五篇 (價 2.8 千・圓)

「日本學術論叢」次回刊行豫定

一 柳 茂著・國民經濟確立期に於ける農民經濟構造  
藤間生大著・日本古代家族

#### ◇執筆者紹介

上林貞治郎氏 現大阪商科大学助教授。  
主要論文。本書中参考文献参照。  
渡部 牧氏 帝國農會指導部を経て、  
現在精密機械統制會勞務部勤務。主  
要論文。「共同作業の實證的研究」  
(帝國農會報 昭十七年八月號)「農  
村更生と部落農業團體」(厚生問題  
昭十七年九月號)



「日本學術論叢」 出版の辭

大東亞建設の難事業のさ中にあつて、わが國の出版界が量質ともに著しい發達を見つゝあることは、まことに御同慶に耐えませぬ。弊店も及ばずながら、出版界の一隅にあつて聊か國運の隆盛に寄與し得ることを衷心の快事となすものであります。幸ひ讀者の堅實な御支持を得まして、廣く經濟社會および文化百般の問題を提げて江湖の御期待に報ひ得るに到り、出版者たるもの本懐之に過ぎるものはありません。

併しながら他面に於いて、紙面狹隘のために、出づべくしてその機會を得ない多くの價値ある研究が埋藏されてゐることも忘れてはなりません。特に雜誌紙面の不足が、眞摯にして深長な學術研究論文の發表のはけ口を塞いでゐることはその一つであります。弊店は各方面の研究者の卒直な要求に促されて、モノグラフ形式の出版に着目し、こゝに「日本學術論叢」を續々出版することに致しました。學術文化各種の方面に亘り、今日の雜誌によつても單行本によつても充されない學術的長論文を一つ一つ研究家の手許に送りたいと考へるのであります。藉すに若干の日時を以つてしますれば、必ずや學術上文化上、効果と意義との大いなるものがあり、弊店の微意のある處を普く知つて頂けると確信するものであります。

昭和十八年一月

伊藤書店主

伊藤長夫



津田書店

〒100 東京都千代田区千代田 1-1-1

五洲堂

和美







¥ 1.00